

# 泉南市遺跡群発掘調査報告書XXVI

泉南市文化財調査報告書 第四十九集

2009. 3

泉南市教育委員会



## 序 文

私たちのまち泉南市は、近年の都市化に伴い大きくその姿を変貌させてきましたが、古来より温暖な気候条件を有し、北に海の幸豊かな大阪湾、南に緑豊かな和泉山脈という優れた自然環境に恵まれた中に人々が居住した結果、市内には数多くの遺跡・文化財が残されております。

この先人の残した貴重な文化遺産を保護し、未来に伝えていくという重要な責務を果たすため、本市教育委員会ではさまざまな開発に対して緊急発掘調査を行って参りました。本書により更なる考古学研究の進展を期待すると同時に、市民の皆様には更なる文化財の普及啓発にも努めてまいりたいと思います。

また、来年度は史跡海会寺跡の整備終了から15年目にあたる年でもあり、史跡海会寺跡広場の維持管理を含めたより一層充実した文化財保護行政を推進して参りたいと思います。

最後になりましたが、調査にご協力頂きました地元土地所有者、近隣住民の皆様、並びに関係諸機関の方々には、深く感謝の意を述べさせていただきますと同時に、今後とも本市の文化財行政により一層のご理解、ご指導を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

平成21年3月

泉南市教育委員会  
教育長 梶本 邦光

## 例 言

1. 本書は、泉南市教育委員会が平成20年度国庫補助事業として計画し、生涯学習課が実施した泉南市遺跡群の緊急発掘調査事業の報告書である。
2. 調査は、泉南市教育委員会生涯学習課、石橋広和・城野博文を担当者とし、平成20年4月1日に着手し、平成21年3月31日に終了した。なお、本書に掲載している内容は、平成20年1月1日から平成20年12月31日までのものである。
3. 現地調査および整理の実施にあたっては蒲生徹幸、蔵田弘幸、藤野 渉、真鍋紀美子諸君らの協力を得た。
4. 本書の執筆は第1章ならびに第2章第2節-1、2を石橋が行い、その他の執筆および編集は城野が行った。
5. 現地調査における写真撮影は各担当者が行い、出土遺物の写真撮影は城野が行った。
6. 調査における出土遺物および図面、写真などの諸記録は、泉南市埋蔵文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを望むものである。

## 凡 例

1. 各調査区には個別の番号を付した。番号の構成は、「遺跡略称 - 調査年度 - 通し番号」である。遺跡略称は、男里遺跡 - ON、本田池遺跡 - HN、座頭池遺跡 - ZT、岡田西遺跡 - OKDW、中小路西遺跡 - NKW、北野遺跡 - KT、中小路遺跡 - NK、仏性寺跡 - BSである。調査年度は西暦の上位2桁を省略して表記している。
2. 図中の方位は、PL. 1・2では真北を、各調査区位置図・地形図では国土座標VI系にもとづく座標北を、各調査区平面図では磁北をあらわしている。
3. 図版中に示したレベル高は、T.P. + (m) の数値を使用しているが、T.P. +は省略している。
4. 本書で扱う地形分類図は、豊田兼典氏が作成した。(PL.2)
5. 遺構名称は、遺構の種類を表すアルファベットと任意の数列の組合せで表記している。本書にて扱う遺構の種類はPit-ピット、SK-土坑、SD-溝である。
6. 遺物実測図の断面は、瓦-トーン、その他-白抜きのように区分している。
7. 遺物実測図と写真図版において遺物番号は統一している。

# 目 次

第1章	調査の経過	1
第2章	男里遺跡の調査	
	第1節 既往の調査	6
	第2節 08-1 区の調査	8
	第3節 08-2 区の調査	9
	第4節 08-3 区の調査	10
	第5節 08-4 区の調査	11
	第6節 08-5 区の調査	12
	第7節 08-6 区の調査	13
	第8節 08-7 区の調査	14
	第9節 07-8 区の調査	14
	第10節 07-9 区の調査	15
	第11節 07-10 区の調査	16
第3章	本田池遺跡の調査	
	第1節 既往の調査	18
	第2節 08-1 区の調査	19
第4章	座頭池遺跡の調査	
	第1節 既往の調査	20
	第2節 08-1 区の調査	21
第5章	岡田西遺跡の調査	
	第1節 既往の調査	22
	第2節 07-1 区の調査	23
	第3節 07-2 区の調査	23
第6章	中小路西遺跡の調査	
	第1節 既往の調査	25
	第2節 08-1 区の調査	25
	第3節 08-2 区の調査	26
第7章	北野遺跡・中小路遺跡の調査	
	第1節 既往の調査	28
	第2節 08-1 区の調査	29
第8章	仏性寺跡の調査	
	第1節 既往の調査	32
	第2節 07-2 区の調査	32
第9章	まとめ	34
	報告書抄録	巻末

## 挿 図 目 次

第 1 図	男里遺跡調査区位置図	7
第 2 図	男里遺跡 08-1 区地形図	8
第 3 図	男里遺跡出土遺物	9
第 4 図	男里遺跡 08-2 区地形図	10
第 5 図	男里遺跡 08-3 区地形図	11
第 6 図	男里遺跡 08-4 区地形図	12
第 7 図	男里遺跡 08-5 区地形図	12
第 8 図	男里遺跡 08-6 区地形図	13
第 9 図	男里遺跡 08-7 区地形図	14
第 10 図	男里遺跡 07-8 区地形図	15
第 11 図	男里遺跡 07-9 区地形図	15
第 12 図	男里遺跡 07-10 区地形図	16
第 13 図	本田池遺跡、座頭池遺跡、岡田西遺跡、中小路西遺跡、 北野遺跡・中小路遺跡、仏性寺跡調査区位置図	18
第 14 図	本田池遺跡 08-1 区地形図	19
第 15 図	座頭池遺跡 08-1 区地形図	20
第 16 図	岡田西遺跡 07-1 区地形図	22
第 17 図	岡田西遺跡 07-2 区地形図	24
第 18 図	中小路西遺跡 08-1 区地形図	25
第 19 図	中小路西遺跡 08-2 区地形図	26
第 20 図	北野遺跡・中小路遺跡 08-1 区地形図	29
第 21 図	北野遺跡・中小路遺跡 08-1 区出土遺物	30
第 22 図	仏性寺跡 07-2 区地形図	32
第 23 図	仏性寺跡 07-2 区出土遺物	33

## 表 目 次

第 1 表	平成 20 年発掘および試掘調査届出一覧表	2
第 2 表	発掘調査一覧表	3
第 3 表	試掘調査一覧表	4
第 4 表	立会調査一覧表	5
第 5 表	文化財一覧表	36

## 図 版 目 次

- PL. 1 泉南地域の文化財
- PL. 2 泉南地域の地形分類
- PL. 3 男里遺跡①調査区
- PL. 4 男里遺跡②、本田池遺跡、座頭池遺跡、岡田西遺跡、中小路西遺跡①調査区
- PL. 5 中小路西遺跡②、北野遺跡・中小路遺跡、仏性寺跡調査区
- PL. 6 男里遺跡 08-1・2・3 区
- PL. 7 男里遺跡 08-4・5 ①区
- PL. 8 男里遺跡 08-5 ②・6・7 ①区
- PL. 9 男里遺跡 08-7 ②・07-8・9 区
- PL. 10 男里遺跡 07-10 区、本田池遺跡 08-1 区
- PL. 11 座頭池遺跡 08-1 区、岡田西遺跡 07-1 ①区
- PL. 12 岡田西遺跡 07-1 ②・2 区、中小路西遺跡 08-1 区
- PL. 13 中小路西遺跡 08-2 区、北野遺跡・中小路遺跡 08-1 ①区
- PL. 14 北野遺跡・中小路遺跡 08-1 ②区、仏性寺跡 07-2 区
- PL. 15 出土遺物

# 泉南市遺跡群発掘調査報告書XXVI

## 第1章 調査の経過

平成20年における土木工事に伴う届出件数の状況は、第1表のとおりである。昨年、一昨年と比較して今年度は一転して減少に転じているものの、過去2年の数値の伸びが著しいため、今年度は落ち着きを取り戻したと見ることもできる。

このような状況のもと第2・3表のとおり調査が行われた。本書で報告するのは8遺跡、18調査区である。また、このうち3遺跡、6調査区については平成19年度未報告分を掲載している。それぞれの遺跡について調査の経過を述べたい。

男里遺跡は、市域最大規模の遺跡で、先土器時代から近世まで幅広い時代が確認されている。毎年最も多くの届出と調査が行われるが、今年度もこの傾向は変わらなかった。ここ数年の傾向として、現男里集落内の個人住宅新築および建替えに伴う調査は減少しており、遺跡南東部の府道金熊寺男里線沿いの調査が多くなる傾向が続いた。今年度は7件の調査が行われ、昨年度未報告の3件の調査を併せて報告している。

本田池遺跡は、東西に細長い形状を呈した遺跡である。周知されている形状から調査件数は少なかったが、今年度は初めて個人住宅新築に伴う調査が1件行われ、これを報告している。

座頭池遺跡は、平成2年度の分布調査で周知された遺跡であるが、大半が水田でありこれまで東縁辺部で数件の調査が行われたにすぎなかった。今年度は遺跡東側部分で1件の調査が行われ、これを報告している。

岡田西遺跡は、平成3～5年度にかけて市道市場岡田線新設に伴い大規模な調査が行われたものの、これに続く市道に面した部分では、これまで開発はほとんど無かったため規模の大きな調査は行われてこなかった。しかし、昨年度初めて市道市場岡田線沿いで開発が行われ、これに伴う調査を含めた未報告分2件の調査を報告している。

中小路西遺跡は、平成2年度に分布調査で周知された遺跡である。これまで遺跡を北西から南東に貫く市道の西部で多くの調査が行われ、中世を中心とした遺跡であることが判明している。今年度は遺跡のほぼ中心となる市道の北東側でも1件の調査が行われ、これを報告している。

北野遺跡は、市域では比較的古くから周知されており、個人住宅や開発ともに多くの調査が行われ成果を挙げている。

一方、中小路遺跡は北野遺跡と同様に古くから周知されている遺跡であるが、ほとんどの地域が水田で残されているため調査はほとんど行われていない。今年度は北野遺跡の南西部から中小路遺跡の東部にまたがる地域で1件の調査が行われ、これを報告している。

仏性寺跡は、古くから中世寺院として知られているが、伽藍に直接かかわる遺構は検出されていない。遺跡の北西部で昨年度未報告分1件の調査を報告している。

第1表 平成20年発掘および試掘調査届出一覧表

平成20年12月31日現在

年 月	発 掘		試 掘		合 計	
	件 数	面積 (㎡)	件 数	面積 (㎡)	件 数	面積 (㎡)
20年1月	4	1,680.87	2	2,628.64	6	4,309.51
2月	2	2,165.91	2	2,435.23	4	4,601.14
3月	5	1,258.27	2	5,968.69	7	7,226.96
4月	8	6,130.88	4	10,012.43	12	16,143.31
5月	4	2,952.28	2	2,483.52	6	5,435.80
6月	2	230.52	0	0.00	2	230.52
7月	3	430.69	1	899.07	4	1,329.76
8月	4	2,769.55	2	10,374.56	6	13,144.11
9月	0	0.00	0	0.00	0	0.00
10月	2	3,132.05	0	0.00	2	3,132.05
11月	3	1,938.44	1	554.77	4	2,493.21
12月	2	306.39	0	0.00	2	306.39
合 計	39	22,995.85	16	35,356.91	55	58,352.76

第2表 発掘調査一覧表

平成20年12月31日現在

No.	遺跡名	地区名	位置	面積 (㎡)	用途	調査年月	備考
1	男里遺跡	08-1区	幡代	157.40	個人住宅	平成20年10月	本書掲載 ㊟-22
2	男里遺跡	08-2区	馬場	1168.80	店舗	平成20年7月	同上(確認調査) ㊟-7
3	男里遺跡	08-3区	樽井	2974.65	倉庫	平成20年12月	同上(確認調査) ㊟-23
4	男里遺跡	08-4区	樽井	800.90	宅地造成	平成20年5月	同上(確認調査) ㊟-69
5	男里遺跡	08-5区	男里	1067.20	店舗	平成20年7月	同上(確認調査) ㊟-9
6	男里遺跡	08-6区	男里	1623.61	共同住宅	平成20年7月	同上(確認調査) ㊟-12
7	男里遺跡	08-7区	男里	137.10	電話通信	平成20年5月	同上(確認調査) ㊟-6
8	男里遺跡	07-8区	幡代	320.00	電話通信	平成20年1月	同上(確認調査) ㊟-45
9	男里遺跡	07-9区	馬場	168.19	個人住宅	平成20年1月	同上 ㊟-61
10	男里遺跡	07-10区	男里	1368.73	共同住宅	平成20年2月	同上(確認調査) ㊟-59
11	本田池遺跡	08-1区	樽井	225.90	個人住宅	平成20年9月	同上 ㊟-21
12	座頭池遺跡	08-1区	岡田	2045.89	墓地 管理事務所 便所	平成20年9月	同上(確認調査) ㊟-64
13	岡田西遺跡	07-1区	中小路	2810.00	給油所	平成20年1月	同上(確認調査) ㊟-56
14	岡田西遺跡	07-2区	中小路	71.98	電話通信	平成20年2月	同上(確認調査) ㊟-60
15	中小路西遺跡	08-1区	中小路	175.23	個人住宅	平成20年5月	同上 ㊟-8
16	中小路西遺跡	08-2区	中小路	3218.80	給油所	平成20年5月	同上(確認調査) ㊟-3
17	北野遺跡 中小路遺跡	08-1区	信達大苗代	1935.74	宅地造成	平成20年11月	同上(確認調査) ㊟-26
18	仏性寺跡	07-2区	信達大苗代	71.97	電話通信	平成20年2月	同上(確認調査) ㊟-62

第3表 試掘調査一覧表

平成20年12月31日現在

No.	遺跡名	位置	面積 (㎡)	用途	調査年月日	備考
1	範囲外	信達市場	1,794.01	宅地造成	平成20年1月11日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
2	範囲外	樽井	950.28	倉庫	平成20年1月25日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
3	範囲外	馬場 信達牧野	1,955.48	宅地造成	平成20年1月30日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
4	範囲外	樽井	1,827.27	宅地造成	平成20年1月31日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
5	範囲外	樽井	796.06	共同住宅	平成20年2月27日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
6	範囲外	北野	2,567.72	宅地造成	平成20年3月4日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
7	範囲外	樽井	2,119.56	宅地造成	平成20年5月8日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
8	範囲外	信達牧野	1,097.78	共同住宅	平成20年5月22日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
9	範囲外	中小路	4,909.81	宅地造成	平成20年6月2日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
10	範囲外	樽井	412.26	共同住宅	平成20年6月30日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
11	範囲外	新家	2,135.71	宅地造成	平成20年7月7日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
12	範囲外	信達市場 信達牧野	2,022.97	共同住宅	平成20年7月8日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
13	範囲外	樽井	480.95	倉庫	平成20年7月10日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
14	範囲外	岡田	5,276.21	宅地造成	平成20年7月15日	トレンチ3カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
15	範囲外	樽井	899.07	宅地造成	平成20年7月18日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
16	範囲外	信達市場	1,385.74	宅地造成	平成20年10月16日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
17	範囲外	信達牧野	392.06	共同住宅	平成20年12月18日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。

第4表 立会調査一覧表

平成20年12月31日現在

No.	遺跡名	位置	面積 (㎡)	用途	調査年月日	備考
1	岡田遺跡	岡田	293.48	個人住宅	平成20年2月4日	遺構・遺物は確認されなかった。
2	高田遺跡	男里	120.02	ガ ス	平成20年5月13日	遺構・遺物は確認されなかった。
3	岡中遺跡	信達岡中	265.54	農業用倉庫	平成20年7月14日	遺構・遺物は確認されなかった。
4	男里遺跡	樽井	54.00	ガ ス	平成20年8月18日	遺構・遺物は確認されなかった。
5	高田遺跡	男里	15.00	ガ ス	平成20年8月18日	遺構・遺物は確認されなかった。
6	男里遺跡	男里	36.15	ガ ス	平成20年9月16日	遺構・遺物は確認されなかった。
7	キレト遺跡	男里	19.50	ガ ス	平成20年9月24日	遺構・遺物は確認されなかった。
8	男里遺跡	男里	1.50	ガ ス	平成20年12月10日	遺構・遺物は確認されなかった。

## 第2章 男里遺跡の調査

### 第1節 既往の調査（PL. 1、2）

男里遺跡は市域平野部の北西端に位置し、男里川右岸に形成された沖積地上に展開する旧石器時代から近世に至る複合遺跡である。

地形的には、遺跡中央に位置する金熊寺川旧河道によって形成された氾濫原を主とし、氾濫原東縁に沖積段丘が、さらに遺跡西縁を流れる現男里川河道に沿って自然堤防が発達している。遺跡中央に位置する双子池は旧河道の痕跡とされ、南北2つの溜池の間を「信長街道」<sup>①</sup>が横断する。北に位置する双子下池は13世紀以降に築造<sup>②</sup>され、上池については17世紀代の築造を経て、20世紀前半の拡大によって現在みられる姿になったものと考えられている<sup>③</sup>。現在段丘上には馬場集落があり、自然堤防上には男里集落が立地する。一方、氾濫原は主に耕作地として利用されているが、近年氾濫原と段丘との境界を縫うように大規模な府道が建設されたことで、新たな開発が増加し、周辺の景観も大きく様変わりしつつある。

男里遺跡では、昭和50年代より本市教育委員会をはじめとして、大阪府教育委員会や（財）大阪府文化財センター等による発掘調査が実施され、調査件数の多寡では市内では群を抜くものである。こうした調査によって、これまでに旧石器時代にはじまる数多くの成果が蓄積されており、各時代のたまかな分布も知られつつある。以下にその概要を述べる。

縄文時代後期以前の資料は採集品や二次移動を受けたことが明らかなものに限られる。旧石器時代のナイフ形石器<sup>④</sup>が双子下池より採集され、遺跡南東部より縄文時代中期末から後期初頭の遺物が出土<sup>⑤</sup>するものの、いずれも遺構に伴うものではなく、詳細は明らかでない。縄文時代晩期には双子池北方において長原式併行期のピット<sup>⑥</sup>、遺跡北西縁から北縁部において滋賀里Ⅲ・Ⅳ式期の溝<sup>⑦</sup>や谷<sup>⑧</sup>、遺跡北西部や双子上池において流路<sup>⑨</sup>が確認されている。滋賀里期の遺物にはサヌカイト原礫やチップ、石棒なども含まれることから、近隣に集落が存在する可能性が高い。縄文後期から晩期には遺跡中央から北西部、氾濫原に属する地点に活動の中心が求められる。遺跡中央に位置する双子上池堤体部の調査では長原式期と弥生時代前期の土器が同一の包含層より出土している<sup>⑩</sup>。

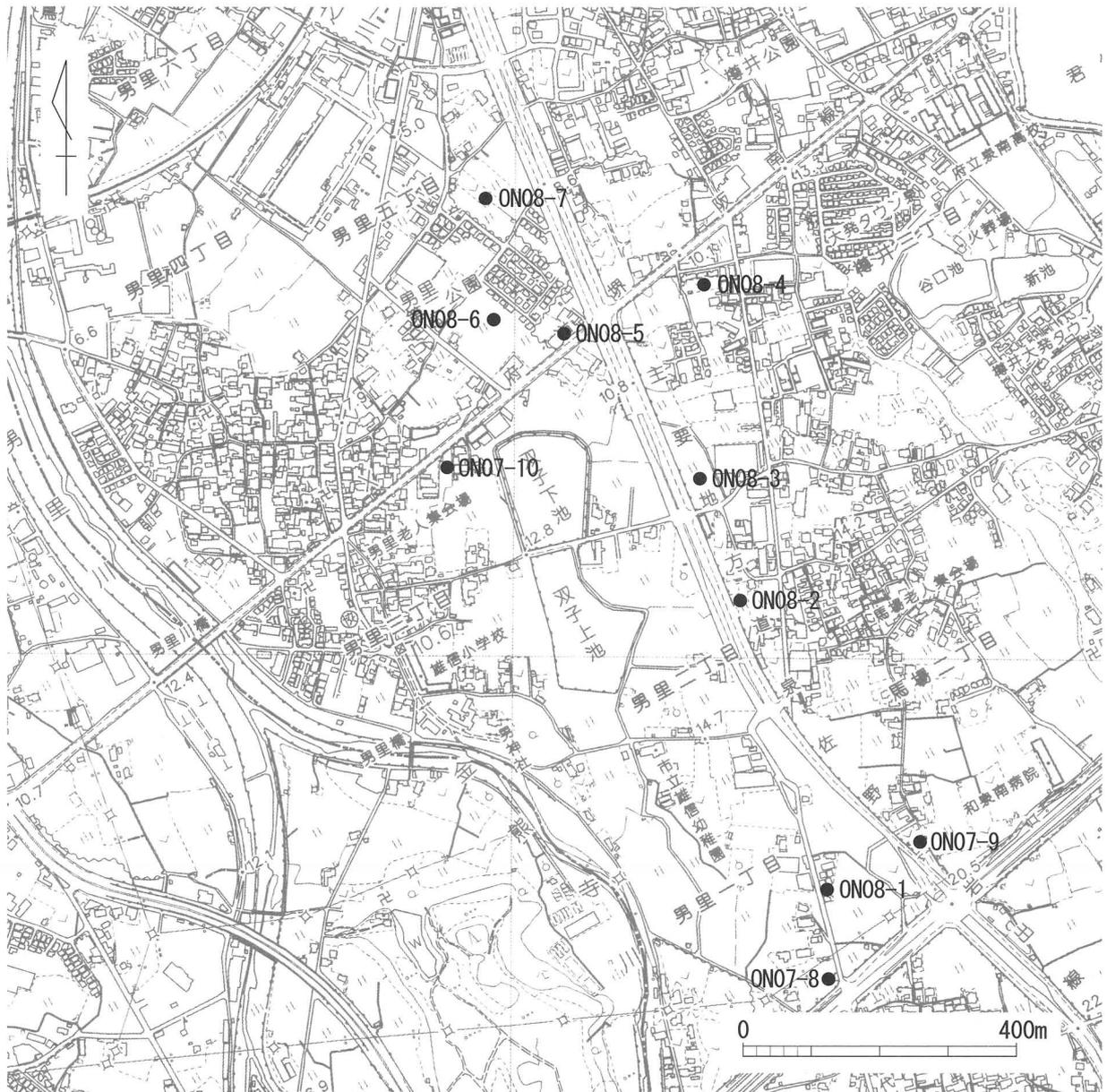
弥生時代前期には双子池の南方に遺跡が展開するものと推定されるが、資料が限定的であり明確さに欠ける。中期前葉には、遺跡北西縁部の先にみた谷の埋土上層に遺物が含まれ、谷の南東側に集落が求められる。中期中葉から後葉には遺跡の南東部にあたる沖積段丘上において、30数棟の竪穴住居をはじめ、掘立柱建物や方形周溝墓、木棺墓などからなる集落が展開する<sup>⑪</sup>。集落の西側には自然流路を利用した大溝が存在し、絵画土器を含む多量の遺物が出土している。大溝や地形的な条件から集落は南北200m、東西100mの範囲に展開するものと考えられている。遺物はⅣ様式のもものが主体を占めており、時期的に限定された集落といえる。集落の北西約500mに位置する双子下池堤体部の調査において当該期のまとまった資料が知られるほか<sup>⑫</sup>、近年は遺跡南東部に位置する05-8区、06-1区、06-9区<sup>⑬</sup>などにおいて新たな資料の獲得が相次いでいる。特に上記集落の中心部より南西約150mに位置する05-8区では大量の弥生土器や石器が出土し、明確な遺構輪郭は不明であるが自然流路を利用した大溝などと考えられるものであった。遺物の遺存状態が良好なことから意図的に破碎

した土器を投棄した可能性が指摘されている。

弥生時代後期から古墳時代にかけて明確なまとまりを持つものは少ない。庄内併行期から布留式期には双子池内部を南北に縦断する流路および流路東岸に展開する集落が確認されている。集落は方形竪穴住居<sup>®</sup>や掘立柱建物、井戸<sup>®</sup>よりなるが、その広がりについては明瞭でない。続く古墳時代中期に属する遺構や遺物は今のところ知られない。後期には遺跡北西縁部にあたる氾濫原上に竪穴住居<sup>®</sup>が確認されている。

飛鳥、奈良時代には遺跡の中心部、双子池の周辺へと活動の中心が移動する。双子池の東西両岸にあたる地点より竪穴住居、掘立柱建物、廃棄土坑など<sup>®</sup>が確認され、遺跡北西部においても掘立柱建物<sup>®</sup>が確認される。また双子池北端部ではしがらみを備えた流路<sup>®</sup>が確認されている。

平安時代では双子池西側に掘立柱建物<sup>®</sup>、双子池北東にも掘立柱建物<sup>®</sup>や廃棄土坑<sup>®</sup>などが確認される。いずれも10世紀後半代のものである。これらに少し遅れて北西部において掘立柱建物よりなる



第1図 男里遺跡調査区位置図

集落<sup>◎</sup>が出現する。同時代に関連するものとして、延長5（927）年成立の『延喜式』に和泉国駅として日部および嘸啖の駅に馬七疋が備えられたことが記され、同神名帳には日根郡男神社が登記されている。現在も遺跡の南西端に鎮座する男神社である。一方嘸啖駅の実態は明らかではなく、当時の南海道のルートも確定していない。とはいえ男里遺跡は古代南海道の推定ルート<sup>◎</sup>に面しており、上述したように考古学的にも前代より連綿と遺構、遺物が確認されることから、嘸啖郷の中心地であった可能性が高く、嘸啖駅を周辺に求めても大過ないものと思われる。

平安時代末から鎌倉時代には、前代の集落域に加えて、遺跡南東部、現馬場集落の南端においても集落が現れる<sup>◎</sup>。周辺では瓦類の出土が顕著<sup>◎</sup>で、小字より「安良寺」の存在が想定される。同様に現男里集落の南西部においても瓦類が多く出土<sup>◎</sup>しており、現在の光平寺に連なるものと考えられる。昨年度紹介した光平寺跡出土資料<sup>◎</sup>には12世紀後半から14世紀までの軒瓦がみられ、他に15世紀の土器類がまとまって出土していることから、中世光平寺は12世紀後半の創建の後、14世紀に至るまで屋瓦の補修を伴う維持管理がなされ、15世紀代に何らかの伽藍縮小の動きがあったものと推測される。ほぼ同時期に集落が共存するという状況は以降も継承されたものとみえ、中世の遺物包含層が現男里集落内および馬場集落北方に多く確認されている。現在みられる集落域が中世を経て形成されたものであることを示唆するものといえよう。さらに詳しくみれば、遺跡南東部の集落は現馬場集落南端周辺に展開する一群と、より南方に展開する一群<sup>◎</sup>があり、後者では鍛冶炉と考えられる遺構や12世紀の遺物が顕著に出土するものの長くは存続せず、13世紀代には廃絶しているようである。現馬場集落南端の一群においても13世紀から14世紀の集落と集落廃絶後に設けられた大規模な溝が確認されている<sup>◎</sup>。溝は集落廃絶後の耕地開発に関連するものと考えることが可能であり、集落域そのものは北に移動し、現在の馬場集落と重なる地点へと移ったものと予測される。

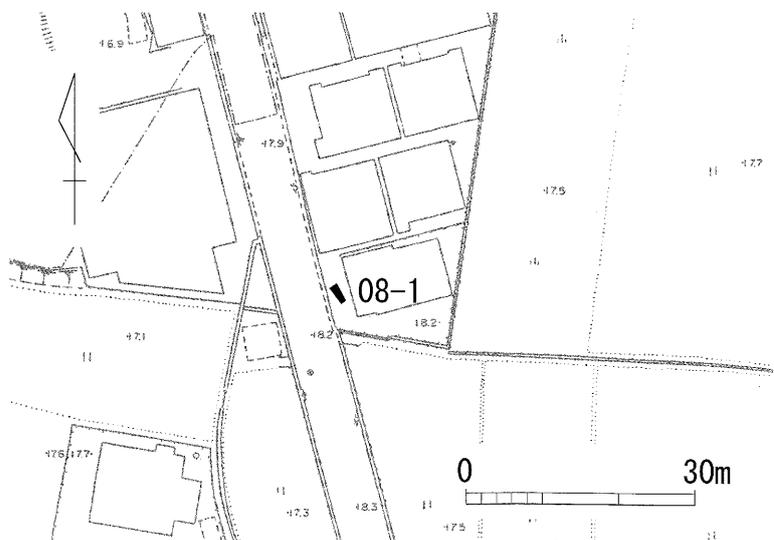
こうした中世後半を画期とする集落の動向はいわゆる集村化現象として捉えることが可能である。市内の遺跡においても、いくつかの例<sup>◎</sup>を挙げることができる。中世後半以降に形成された集落は伝統的景観を形成しつつ、現在に連なっていく。

## 第2節 08—1区の調査

### 1. 位置（第1、2図）

調査区は遺跡の南西部にあって、国道26号「幡代」交差点より約200m北上した地点である。地形的には沖積段丘もしくは氾濫原に属する。

近年、周辺での調査が相次いでいる。南約50mに位置する06—1区や北西約100mに位置する05—8区より弥生時代中期の遺物が多く出土している<sup>◎</sup>。



第2図 男里遺跡08-1区地形図

現況は更地であり、トレンチは1ヵ所設定した。

## 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 3、6)

盛土(1層、約70cm)を除去すると暗灰色シルト(2層、約10cm)、淡灰褐色混じり暗橙色砂質シルト(3層、約15cm)、淡灰褐色混じり暗褐色砂質シルト(4層、約20cm)の各層がそれぞれ水平堆積を呈する。続いて淡暗褐色砂(5層、約20cm)がほぼ全域にみられるが、トレンチ南端部では6層である淡暗褐色礫混土が露呈する。2層は現代の耕作土、3層は床土、4層は旧耕作土である。5、6層はともに河川性堆積による。5層ならびに6層の上面において精査を行ったが、遺構は確認されなかった。

## 3. 遺物 (PL. 15、第3図)

1は土師器小皿である。層位的な取り上げが行えなかったため、出土層位は明らかでない。口縁の一部にわずかに煤が付着しており、灯明皿と考えられる。底部より明瞭な稜線を描いて鋭く立ち上がる体部を持つ。体部から口縁部、内底面の一部がヨコナデが加えられる。内底面には1条の暗文が認められる。暗い乳白色を呈する。

## 第3節 08-2区の調査

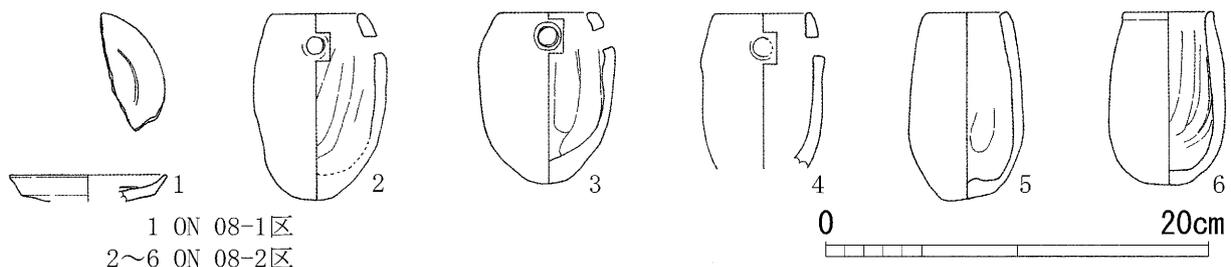
### 1. 位置 (第1、4図)

調査区は、遺跡南東部の現在の馬場集落西端に位置している。府道金熊寺男里線に面しており南方約150mの道路部分の調査<sup>※</sup>では、弥生中期の集落中心部分が確認されている。地形的には男里川の氾濫原上に立地するものと考えられる。トレンチは擁壁部分と建物部分に4ヵ所設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 3、6)

第1トレンチは、滋味土(約20cm)、現代の床土である赤褐色砂質シルト(約10cm)の下層には褐色砂質シルト(約10cm)、暗黄褐色粘性シルト(約50cm)を介在しクサリ礫を多量に含んだ暗黄褐色粘性シルトの地山に至る。遺構は検出されなかった。遺物は3層の褐色砂質シルトから弥生時代の飯蛸壺(2~6)が出土している。

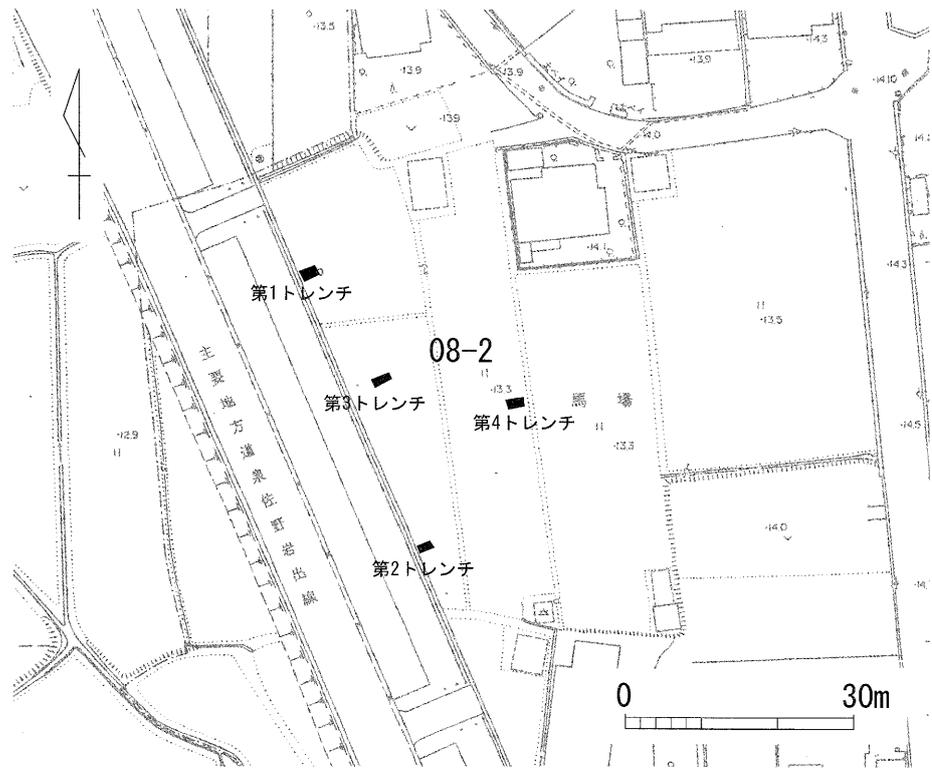
第2トレンチは、第1トレンチ同じく滋味土(約15cm)、赤褐色砂質シルト(約5cm)、褐色砂質シルト(約20cm)、暗黄褐色粘性シルト(約15cm)と続くが、地山の6層上面にクサリ礫を多量に



第3図 男里遺跡出土遺物

含んだ暗褐色粘性シルト（約 25 cm）を介在することが確認された。遺構・遺物は確認されなかった。

第 3 トレンチは、第 2 トレンチとほぼ同じ層位を示し、滋味土（約 20 cm）、赤褐色砂質シルト（約 10 cm）、褐色砂質シルト（約 15 cm）、暗黄褐色粘性シルト（約 25 cm）クサリ礫混入暗褐色粘性シルト（約 35 cm）、クサリ礫混入暗黄褐色粘性シルト（地山）となる。遺構・遺物は確認されなかった。



第 4 図 男里遺跡 08-2 区地形図

第 4 トレンチは、滋味土（約 15 cm）、赤褐色砂質シルト（約 5 cm）、褐色砂質シルト（約 15 cm）、クサリ礫混入暗褐色粘性シルト（約 30 cm）、クサリ礫混入暗黄褐色粘性シルト（地山）となり、4 層である暗黄褐色粘性シルトは確認されなかった。遺構・遺物は確認されなかった。

### 3. 遺物 (PL. 15、第 3 図)

2～6 は第 1 トレンチより出土した弥生土器飯蛸壺である。いずれもほぼ同程度の法量のものであるが、全体に丸みを帯び、玉子形を呈するもの（2、3）と、平底から直線的に立ち上がる体部を持つもの（4～6）に分けることが可能である。現状では 2～4 の口縁端部より 1 cm 程下がった位置にそれぞれ 1 ヶ所の穿孔がみられる。穿孔は外面より行う。摩滅が激しく器壁外面の調整については詳らかでないが、内面には縦方向のナデ調整が顕著に残り、全体を手づくねにより成形したものと考えられる。図示しなかったが、同時に別個体の底部が 5 点出土している。調査範囲が狭く、遺構であるという確証は得られなかったが、他に弥生土器等が全く出土しておらず、一般の包含層とは考え難い。飯蛸壺のみを選別し、廃棄したものであろうか。

## 第 4 節 08 - 3 区の調査

### 1. 位置 (第 1、5 図)

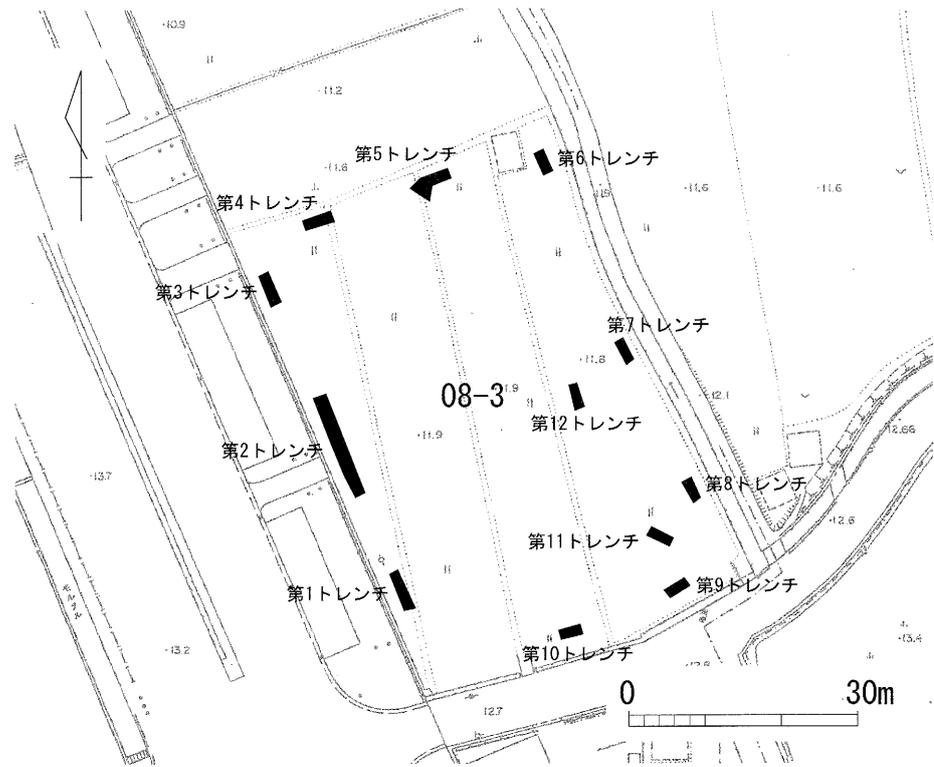
調査区は遺跡東部、双子池の東方約 200 m に位置する。西に府道金熊寺男里線が面し、南には所謂

「信長街道」が面する。地形的には氾濫原と沖積段丘の境界に立地している。

調査区の南に隣接する96-1区<sup>㊤</sup>では飛鳥時代の掘立柱建物や竪穴住居、廃棄土坑が確認されており、また96-1区西側の府道敷きの調査においても同時代の掘立柱建物をはじめとする多くの遺構が確認されている<sup>㊤</sup>。

現況は休耕地であり、トレンチは擁壁

部分および建物部分について12カ所設定した。



第5図 男里遺跡08-3区地形図

## 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 3、6)

上述のように全12カ所のトレンチを設けたが、各トレンチ共に基本的な層序は概ね共通するものであった。以下、最も代表的な第2トレンチについて、詳細を述べる。

暗灰黒色土(1層、約20~30cm)、暗橙色混じり淡灰褐色砂質土(2層、約5~20cm)、暗褐色シルト(3層、約30cm)と続き、地山であるにぶい黄褐色シルトへと至る。このうち1層は耕作土、2層は床土である。3層は男里遺跡の北半部において広く分布する黒褐色系土層に対応するものと考えられ、本調査区においてもほぼすべてのトレンチにおいて確認された。中でも調査区の北端に位置し、地形的に低い第3~5トレンチにおいて最も厚く堆積している。3層の影響により地山上面が黄灰色へと変化するほか、3層と地山との攪拌層が確認される地点も多い。

各トレンチにおいて3層ならびに地山面において精査を行ったが、遺構は確認されず、また遺物も出土しなかった。

## 第5節 08-4区の調査

### 1. 位置(第1、6図)

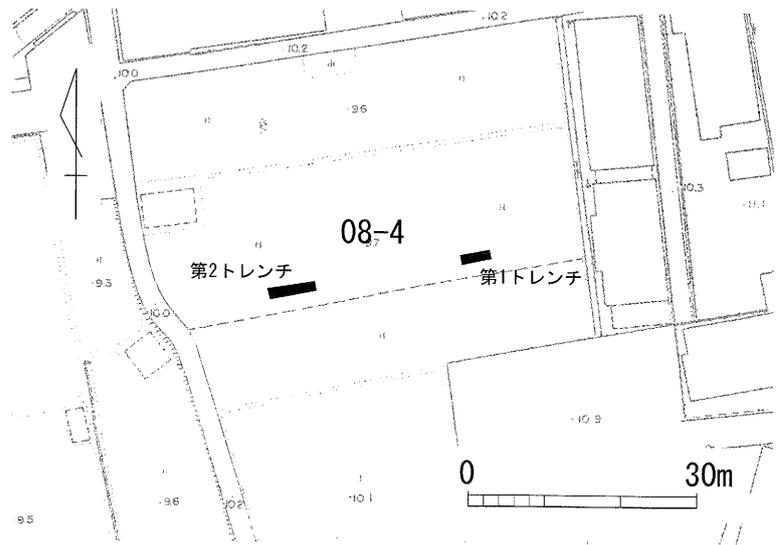
調査区は遺跡北東部にあって、府道堺阪南線「双子池北」交差点の東約150mに位置する。地形的には沖積段丘に属する。周辺には比較的多くの耕作地が残るが、近年の宅地開発によって少しずつ景観が変わりつつある地点である。調査区の南西約50mの地点において05-4区<sup>㊤</sup>をはじめとして数

件の調査が行われており、明確な遺構は未確認ながらも、比較的安定した地山面と地山直上に厚く堆積する黒褐色系土層が共通して確認されている。

現況は更地であり、トレンチは2カ所設定し、東から西へ第1、2トレンチと呼称する。

## 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 3、7)

暗灰褐色砂質土(1層、約20cm)、褐色混じり暗灰褐色砂質土(2層、約10～30cm)、暗褐色シルト(3層、約20cm)と続き、地山であるにぶい黄褐色シルトへと至る。このうち1層は耕作土、2層は旧耕作土と考えられるもので、第2トレンチでは1層は既に除去されていた。また3層上面において耕作に伴う多くの起伏が生じている。3層は周辺で広く確認される黒褐色系土層に対応するものと考えられるものである。第1トレンチの方が若干淡く、僅かに地山土のブロックを含むという違いが認められる。地山を構成するシルト層は粘性が弱く、幾分不安定な様相を呈するものである。特に第2トレンチの西半では円礫を多く含み、より不安定な状況を示す。地山上面において精査を行ったが、遺構は確認されなかった。また遺物も出土しなかった。

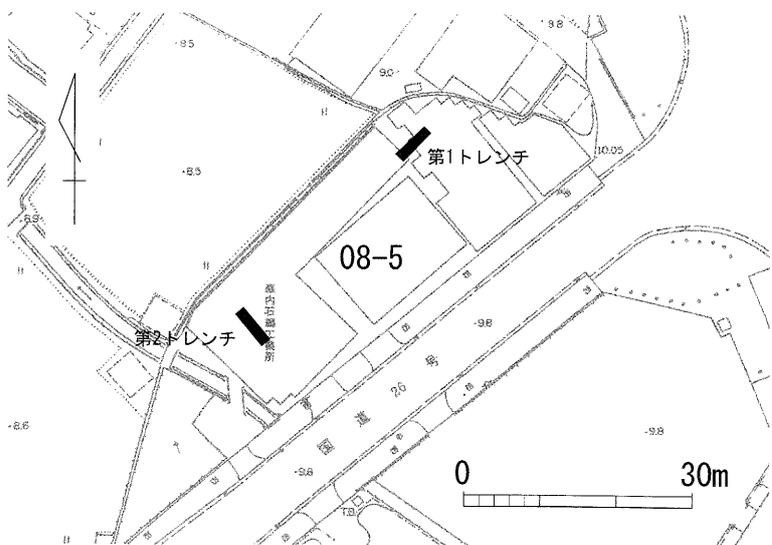


第6図 男里遺跡 08-4区地形図

## 第6節 08-5区の調査

### 1. 位置(第1、7図)

調査区は遺跡北東部にあって、府道堺阪南線「双子池北」交差点の西約50mに位置する。地形的には旧河道もしくは氾濫原に属する。調査区の南東約50mに95-2区<sup>ⓐ</sup>、96-17区<sup>ⓑ</sup>が位置する。95-2区では前節でも触れた黒褐色系土層をベースとする平安時代集落が確認されている。また東に隣接する96-17区では黒褐色系土層を削平したうえで耕地としていることから、集落がさらに東方へと広がっていたものと考えることが可



第7図 男里遺跡 08-5区地形図

能である。同様に黒褐色系土層の削平を伴う耕作地は本調査区の東約 50 m に位置する府道敷きの調査<sup>⑥</sup>においても確認されている。

現況は更地であり、トレンチは 2 ヲ所設定した。東から西へ第 1、2 トレンチと呼称する。

## 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 3、7、8)

確認された層序は両トレンチ共に概ね共通する。盛土 (1 層、約 80 cm) 以下、灰色砂質土 (2 層、約 15 cm)、淡灰褐色混じり暗橙色砂質土 (3 層、約 20 cm)、淡灰褐色砂質土 (4 層、約 15 cm) がいずれも水平堆積を呈し、暗褐色灰色シルト (5 層、約 20 ~ 50 cm) を経て、地山である暗褐黄灰色礫混土へと至る。2 層および 3 層は現代耕作土と床土、4 層は旧耕作土と考えられる。5 層は周辺でみられる黒褐色系土層に対応するものと考えられるものである。地山はクサリ礫を多く含むもので、若干不安定な様相を示すが、第 2 トレンチ北半においては 5 層直下に安定したにぶい黄灰色シルトが露呈しており、地山の状況が一様でないことが確かめられた。

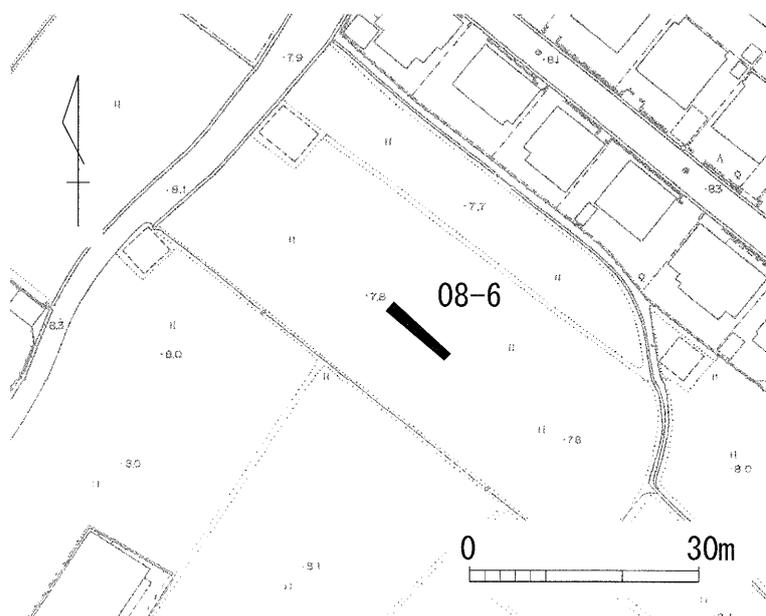
5 層ならびに地山上面において精査を行ったが、遺構、遺物は確認されなかった。

## 第 7 節 08 - 6 区の調査

### 1. 位置 (第 1、8 図)

調査区は遺跡の北部にあって、府道金熊寺男里線「男里原田」交差点より南西約 200 m、双子池北方に広がる耕作地に含まれる地点である。地形的には旧河道に属する。調査区の東約 20 m に 98 - 4 区、西隣接地には 97 - 8 区<sup>⑥</sup>がそれぞれ位置し、いずれも氾濫原や旧河道に属する旧地形が明らかとなっている。

現況は休耕地であり、トレンチは 1 ヲ所設定した。



第 8 図 男里遺跡 08-6 区地形図

### 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 3、8)

現代耕作土である灰黒色シルト (1 層、約 15 cm) および床土である橙灰色土 (2 層、約 15 cm)、旧耕作土である橙色混じり淡灰褐色砂質土 (3 層、約 15 cm) の各層が水平堆積を呈し、以下それぞれ自然堆積である暗褐色砂質シルト (4 層、約 50 cm)、淡暗灰褐色砂質シルト (5 層、約 10 cm)、暗青灰色シルト (6 層、約 20 cm)、暗青灰色砂礫 (7 層、約 15 cm) と続き、にぶい暗黄褐色粘土へと至る。同層はトレンチ東側において還元し青灰色を呈する。

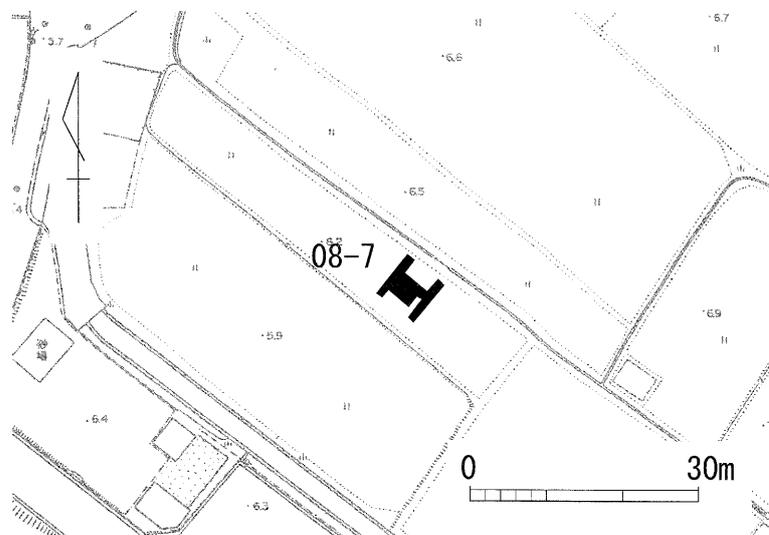
7層直下において精査を行ったが遺構は確認されず、遺物は7層に土師器細片が僅かに含まれていたが、取り上げ不能であったため詳細は不明である。

## 第8節 08-7区の調査

### 1. 位置（第1、9図）

調査区は遺跡の北端部にあって、府道金熊寺男里線「男里原田」交差点より西へ約100mに位置する。地形的には旧河道もしくは氾濫原に属する。周辺では調査区の南東約50mに位置する97-7区<sup>㊤</sup>において8世紀後半の遺構、遺物が確認されている。

現況は旧耕地であり、トレンチは1ヵ所設定した。



第9図 男里遺跡08-7区地形図

### 2. 層位と遺物の出土状況

(PL. 3、8、9)

淡灰黒色土（1層、約30cm）、淡灰褐色混じり暗橙色土（2層、約10～30cm）、褐灰色～暗褐色礫混土（3層、約10～20cm）と続き、地山である淡橙黄色礫混シルトへと至る。トレンチの南東隅では淡橙黄色礫混シルトの上に同じく地山と考えられる黄白色礫混土が存在する。1、2層は現代耕作土および床土であり、3層をベースとする耕作関連の落ち込みが存在する箇所もある。3層は08-3区などにおいてみられた黒褐色系土層に対応するものと考えられる。地山には起伏が多くみられ、やや不安定な状況を示している。窪みには3層が堆積しており、調査ではそれらが不定形の土坑として検出された。規模の大きなもので長径2m、短径1m、検出面よりの深さ40cmを測る。自然地形によるものと考えられるほか、風倒木である可能性もある。こうした土坑のほか、遺構は確認されず、遺物も出土しなかった。

## 第9節 07-8区の調査

### 1. 位置（第1、10図）

調査区は遺跡の南端にあって、国道26号「幡代」交差点の北西に接する。現幡代集落の北端に位置する耕作地であり、地形的には沖積段丘に属する。周辺では調査区の北西約100mの地点において数件の調査が行われており、91-13区<sup>㊤</sup>では弥生から古墳時代に埋没した開析谷やピットが、91-15区<sup>㊤</sup>では弥生時代以前の不定形の落ち込みなどが確認されている。

現況は休耕地であり、トレンチは1ヵ所設定した。

## 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 4、9)

現耕作土である暗灰黒色土（1層、約15cm）、淡灰褐色混じり淡橙色砂質シルト（2層、約15cm）を除去すると、淡灰褐色砂質土（3層、約30cm）を経て、地山であるにぶい黄褐色シルトへと至る。3層は旧耕作土であり、部分的に地山との間に暗褐灰色シルト（4層、約10cm）が介在する箇所もある。4層からは遺物は出土しなかったが、3層に同層のブロックが含まれること、さらに弥生土器かと思われる極細片が含まれることからすると、4層は遺物包含層である可能性が考えられる。地山であるにぶい黄褐色シルトは粘性が弱く、やや軟弱な地盤である。調査終了後の工事立会によって、地山は約1.3mの厚さで堆積し、直下に河川性堆積による礫層が広がっていることが確認された。

地山上面において精査を行ったが遺構は確認されず、遺物も3層にみられたほかは全く出土しなかった。

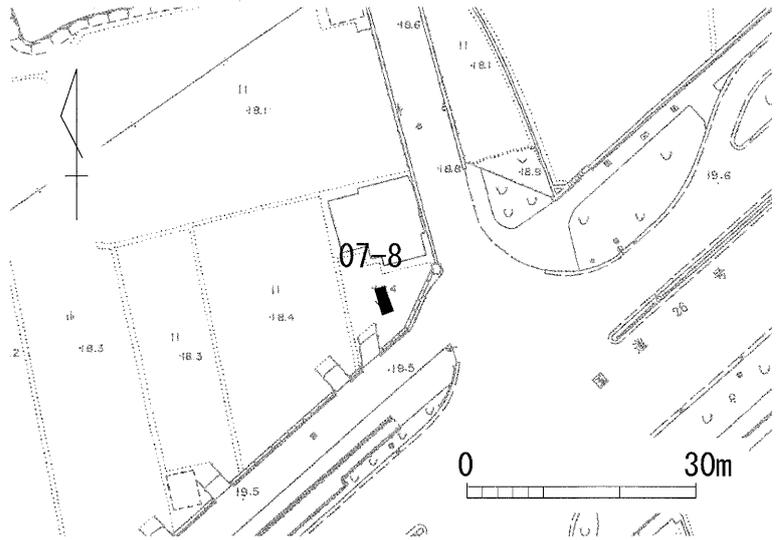
## 第10節 07-9区の調査

### 1. 位置（第1、11図）

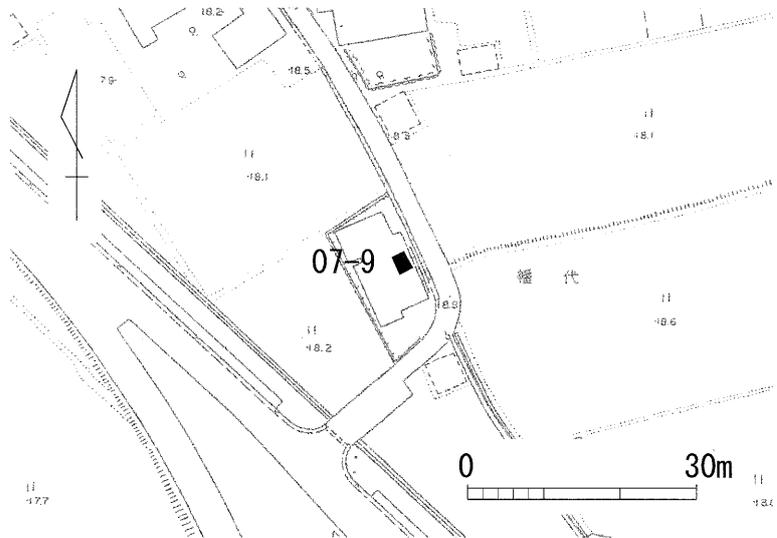
調査区は遺跡の南東縁部にあつて、国道26号「幡代北」交差点の北約100mに位置する。現馬場集落と幡代集落の間に広がる耕作地に含まれ、地形的には沖積段丘に属する。調査区周辺は府道建設に伴う発掘調査によって遺跡範囲が拡大された箇所にあたり、その他の調査はこれまで行われていない。

現況は更地であり、トレンチは1カ所設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 4、9)



第10図 男里遺跡 07-8区地形図



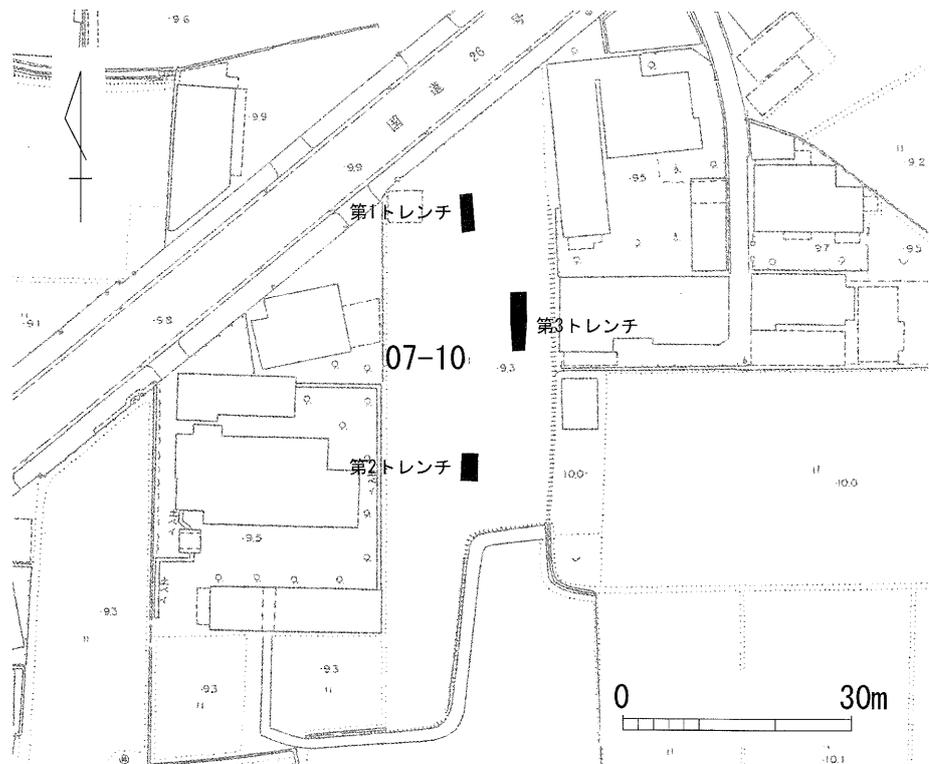
第11図 男里遺跡 07-9区地形図

盛土（1層、約80～100cm）を除去すると、部分的に耕作土である暗橙色混じり暗灰褐色砂質土（2層、約10cm）がみられるが、基本的には暗褐色礫混土（3層、約30～50cm）、暗灰色礫混シルト（4層、約30cm）を経て暗灰色砂礫へと至る。4層はトレンチの北端にのみ存在するもので、大半の地点では3層直下に5層が広がる。これら3～5層はいずれも河川性堆積を示すことから、調査区は氾濫原もしくは段丘上の谷地形に含まれるものと考えられる。遺物は出土せず、遺構も確認されなかった。

## 第11節 07－10区の調査

### 1. 位置（第1、12図）

調査区は遺跡の中央部にあつて、府道堺阪南線「双子池北」交差点の西約300mに位置する。現男里集落の東に広がる耕作地に含まれ、地形的には氾濫原および谷底低地に属する。周辺では調査区の東約50mに位置する97－4区<sup>㊦</sup>、99－1区<sup>㊦</sup>において古墳時代の遺構、遺物が確認され、東約20mの地点に位置する90－8区<sup>㊦</sup>においても時期不明のピットや溝が確認されている。現況は休耕地であり、トレンチは3カ所設定した。



第12図 男里遺跡07-10区地形図

### 2. 層位と遺物の出土状況（PL. 4、10）

いずれのトレンチも基本的な層序は共通している。以下、第3トレンチを中心に説明を加える。灰黒色土（1層、約20cm）、暗橙色混じり暗灰褐色砂質土（2層、約20cm）、黄灰色砂質土（5層、約15cm）、暗灰褐色混じり淡暗褐色シルト（7層、約10～20cm）と続き、にぶい黄灰色シルト（8層、約40～60cm）へと至る。1、2層は現耕作土および床土であり、5層は旧耕作土である。にぶい黄灰色シルト以下には氾濫原を構成する砂礫層が複数みられることから、氾濫原の窪地に自然堆積したものと判断される。同層上面において精査を行ったが遺構は確認されなかった。また遺物も出土しなかった。

- 注 ① 大阪府教育委員会『熊野・紀州街道一調査報告編一』(1987)
- ② 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・II』(1997)
- ③ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・VII』(2003)
- ④ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・VI』(2002)
- ⑤ (財)大阪府文化財センター『男里遺跡』(2005)
- ⑥ 泉南市教育委員会「男里遺跡95-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIII』(1996)
- ⑦ 泉南市教育委員会「男里遺跡・II」『泉南市文化財年報No.1』(1995)
- ⑧ 泉南市教育委員会「E区の調査」『男里遺跡発掘調査報告書』(2002)
- ⑨ 泉南市教育委員会「男里遺跡96-7区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIV』(1997)  
泉南市教育委員会「男里遺跡99-9区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XVIII』(2001)  
大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・VIII』(2004)
- ⑩ ④と同じ。
- ⑪ ⑤と同じ。
- ⑫ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・IV』(1999)
- ⑬ 泉南市教育委員会「男里遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XXIV』(2007)  
06-9区については2006年度泉南市教育委員会による発掘調査、同書に調査区位置掲載。
- ⑭ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・VIII』(2004)
- ⑮ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・V』(2000)
- ⑯ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』(2002)
- ⑰ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』(1978)  
泉南市教育委員会「男里遺跡96-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIV』(1997)
- ⑱ 泉南市教育委員会「D区の調査」『男里遺跡発掘調査報告書』(2002)
- ⑲ ②と同じ。
- ⑳ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』(1978)
- ㉑ 泉南市教育委員会「男里遺跡95-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIII』(1996)
- ㉒ (財)大阪府埋蔵文化財協会「1993年度の調査成果」『男里遺跡』(1994)
- ㉓ ⑱と同じ。
- ㉔ 足利健亮「歴史地理学からみた和泉の古道」『熊野・紀州街道一論考編一』大阪府教育委員会(1987)
- ㉕ 平成2年度、泉南市教育委員会による90-10区の調査、『泉南市遺跡群発掘調査報告書VIII』(1991)にトレンチ位置掲載。  
平成18年度、泉南市教育委員会による06-8区の調査、『泉南市遺跡群発掘調査報告書XXV』(2008)にトレンチ位置掲載。  
(財)大阪府文化財センター『男里遺跡』(2005)
- ㉖ 泉南市教育委員会「男里遺跡99-4区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XVI』(2000)  
(財)大阪府文化財センター『男里遺跡』(2005)
- ㉗ 堀田啓一「考古編」『泉南市史 史料編』泉南市(1982)  
泉南市教育委員会「光平寺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XII』(1995)
- ㉘ 泉南市教育委員会「光平寺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XXV』(2008)
- ㉙ ⑤と同じ。
- ㉚ 平成18年度、泉南市教育委員会による06-8区の調査。  
泉南市教育委員会「男里遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XXV』(2008)
- ㉛ 泉南市教育委員会「幡代遺跡03-3区の調査」『新伝寺遺跡91-1区・幡代遺跡03-3区発掘調査報告書』(2004)  
泉南市教育委員会『戎畑遺跡発掘調査報告書』(2005)
- ㉜ ⑬と同じ。
- ㉝ ⑤と同じ。
- ㉞ 泉南市教育委員会「男里遺跡96-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIV』(1997)
- ㉟ ⑤と同じ。
- ㊱ 泉南市教育委員会「男里遺跡05-4区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XXIII』(2006)
- ㊲ ②と同じ。
- ㊳ 泉南市教育委員会「男里遺跡96-17区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』(1998)
- ㊴ (財)大阪府埋蔵文化財協会「1992年度の調査成果」『男里遺跡』(1994)
- ㊵ 泉南市教育委員会「男里遺跡98-4区の調査、97-8区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XVI』(1999)
- ㊶ 泉南市教育委員会「男里遺跡97-7区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XVI』(1999)
- ㊷ 泉南市教育委員会「男里遺跡91-13区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書IX』(1992)
- ㊸ 泉南市教育委員会「男里遺跡91-15区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』(1993)
- ㊹ 泉南市教育委員会「男里遺跡97-4区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』(1998)
- ㊺ 泉南市教育委員会「男里遺跡99-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XVII』(2000)
- ㊻ 泉南市教育委員会「男里遺跡90-8区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書IX』(1992)

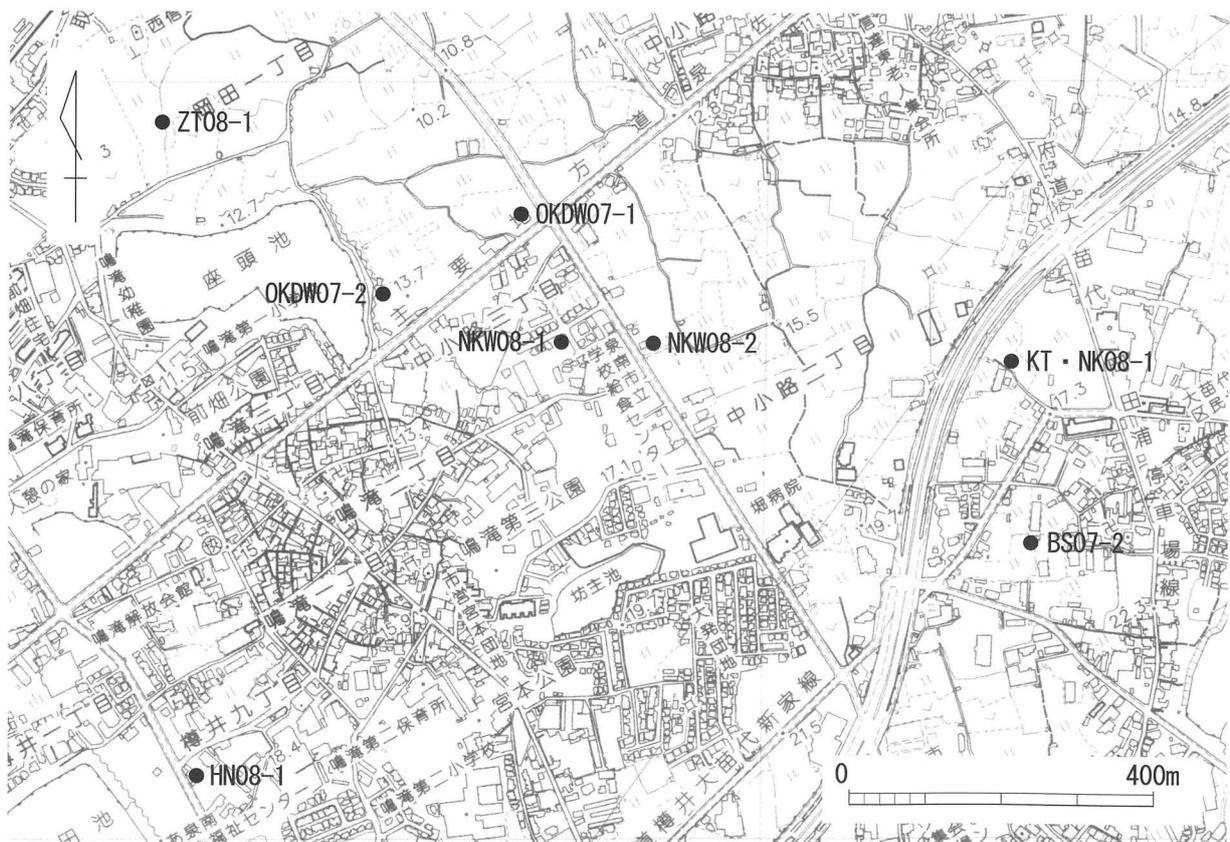
### 第3章 本田池遺跡の調査

#### 第1節 既往の調査 (PL. 1、2)

本田池遺跡は市域平野部の中心にあつて、現在の鳴滝集落の南西に位置する。地形的には市域平野部の大半を占める低位段丘上に立地する。低位段丘北東部においては、岡田遺跡をはじめとする榎井川左岸の遺跡群が知られるが、対照的に遺跡分布が疎な北西部においては、現在のところ周知されるものとしては本遺跡が唯一である。

遺跡の大半が耕作地であり、調査機会はそれほど多いとは言えないが、これまでに数件の調査が行われている。本調査区の北西約50mに位置する94-1区<sup>①</sup>では近世以降の耕作痕のほか、本田池築造以前、中世に属するかと推定される溝が確認され、周辺の開発が中世に遡りうる可能性が指摘される。また北東約130mに位置する98-1区<sup>②</sup>では近世以降の耕作痕が確認されており、94-1区と合わせて近世以降の土地利用に大きな変遷がなかったことが伺える。

遺跡の南西には遺跡の名称ともなった本田池が位置する。本田池は近世以降に段丘上の緩やかな谷地形を堰き止めて築造されたと推定されるものであり、本田池の築造を待って周辺の耕地開発が本格化したものとするれば、現在知られる遺跡分布とも矛盾しないのではないだろうか。今後の更なるデータの蓄積が待たれる。



第13図 本田池遺跡、座頭池遺跡、岡田西遺跡、中小路西遺跡、北野遺跡・中小路遺跡、仏性寺跡調査区位置図

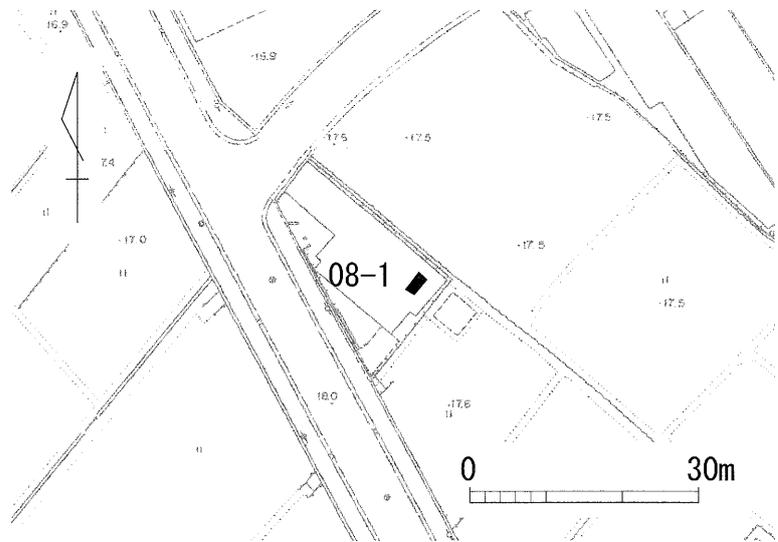
## 第2節 08-1区の調査

### 1. 位置（第13、14図）

調査区は遺跡の南西縁にあつて、遺跡の西部を南北に縦断する市道敷きに面する地点である。本田池東堤の北東約100mに位置する。

地形的には低位段丘に属するものと考えられる。先述した94-1区のうち、本田池築造以前の溝が検出されたトレンチへは南西約50mと近接することから、本調査区においても中世に遡りうる資料の獲得が期待された。

現況は更地であり、トレンチは1カ所設定した。



第14図 本田池遺跡08-1区地形図

### 2. 層位と遺物の出土状況（PL. 4、10）

盛土（1層、約1m）以下、淡橙色砂質シルト（2層、約10cm）を経て、地山である黄白色砂質シルトへと至る。2層は床土であり、盛土にも耕作土が少なからず含まれていることから、かつては耕作地であり、盛土施工時に耕作土のみ除去したものであることがわかる。地山はクサリ礫を多く含む。地山面において精査を行ったが、遺構は確認されなかった。またいずれの層位からも遺物は出土しなかった。

註 ① 泉南市教育委員会「本田池遺跡94-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XII』（1995）

② 泉南市教育委員会「本田池遺跡98-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XVI』（1999）

## 第4章 座頭池遺跡の調査

### 第1節 既往の調査 (PL. 1、2)

座頭池遺跡は市域平野部の中央北端、座頭池の北西に位置する。現在の樽井および岡田集落のほぼ中間地点にあって、大半が耕作地として利用されている地点である。地形的には遺跡の中央部分を低位段丘が占め、その両側に氾濫原および谷底低地がみられる。遺跡の南方に接する座頭池は段丘上の浅谷の北端を堰き止めて築造されたもので、本来的には遺跡の立地する氾濫原や谷地形と一連のものであると考えられる。谷地形は現状においても観察され、遺跡東側では、最大比高約4mを測る。

現在、遺跡の中央北部、段丘の先端部が墓地となっており、周囲の氾濫原に属する地点は耕作地として利用されている。こうした条件下、これまでに行われた調査はさほど多くなく、未だ実態のある遺構、遺物は認められていない。一方、地形的に浅谷の右岸にあたる本遺跡の南東には弥生時代前期の集落が確認された氏の松遺跡<sup>①</sup>をはじめ、中世の集落や生産地である岡田遺跡、岡田西遺跡といった遺跡群が展開している。現状ではこうした遺跡群と本遺跡との関連性は希薄と言わざるを得ないが、



第15図 座頭池遺跡 08-1 区地形図

今後データの蓄積が進めば、周辺遺跡の動向を踏まえた地域史を再構築することも可能であろう。

## 第2節 08－1区の調査

### 1. 位置（第13、15図）

調査区は遺跡のほぼ中央、座頭池北西隅より北へ約150mの地点である。地形的には氾濫原および谷底低地に属するものと考えられ、現況においても調査区の周囲には比高約1～2mを測る一段高い耕作地が認められる。

調査では谷地形を踏襲しているものと考えられる歪な地割を持つ対象地の南端にトレンチを1ヵ所設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況（PL. 4、11）

2m近い盛土を除去すると灰黒色シルトが表れる。現代の耕作土と考えられるもので、盛土中にかなり新しい廃棄物が含まれていることから、近時の造成によって埋め立てられたことが明らかであり、周辺はかなりの改変が行われているものと判断される。遺構、遺物は確認されなかった。

註 ① 泉南市教育委員会『岡田西・氏の松遺跡群発掘調査報告書』（1995）

## 第5章 岡田西遺跡の調査

### 第1節 既往の調査 (PL. 1、2)

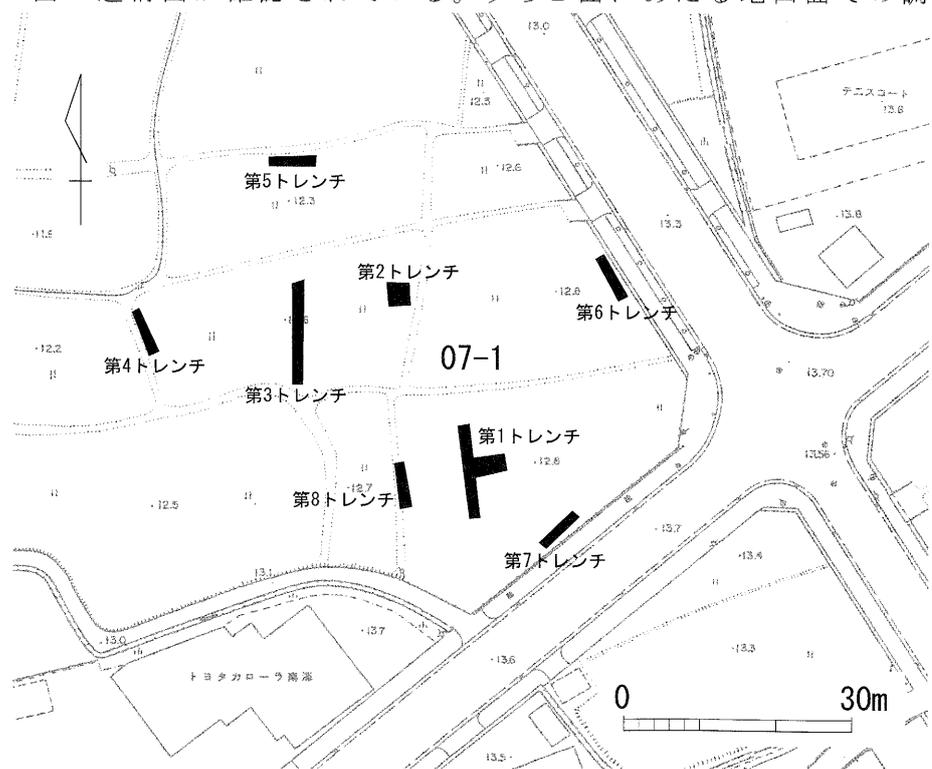
岡田西遺跡は市域中央北端、現中小路集落の北西に位置する。氏の松遺跡、岡田遺跡と接しており、檜井川左岸の低位段丘上に展開する遺跡群の一つである。遺跡の南東端を府道堺阪南線が東西に横断し、また北東には市道市場岡田線が南北に縦断している。また遺跡の南西端は座頭池に接しており、座頭池を挟んで座頭池遺跡と向き合う形となる。

本遺跡は平成元年度、市道建設に先立つ試掘調査によって発見されたもので、その結果を受け、平成3～5年度には、市道予定地についての全面調査が実施されている<sup>①</sup>。以下にその概要を述べる。

縄文時代の有舌尖頭器が地山直上の包含層より出土している。二次移動を受けており、またかなり風化も進んでいるため、これだけで遺跡の有無を語ることはできないが、周辺に縄文時代遺跡が存在した可能性は否定できない。今後の動向が注目されるものである。また本調査に先立つ試掘調査において縄文時代晩期の土器がわずかに出土している。同様に包含層からは古墳時代末期の遺物が比較的まとまって出土しているが、いずれも遺構に伴うものではない。本遺跡の北東約1kmに位置する岡田東遺跡<sup>②</sup>では同時期の竪穴住居や掘立柱建物が確認され、また南東約2kmに位置する海会寺跡<sup>③</sup>においては寺院東隣の集落開始期にあたっており、この頃檜井川左岸における開発が本格的に開始されたものとみることができ、本遺跡もこうした動向の影響を受けている可能性が高いものと考えられる。その後、古代の遺物がわずかに出土しているものの、前代の傾向と大きな変化は伺うことはできない。

調査では基本的に2面の遺構面が確認されている。うち2面にあたる地山面での調査において13世紀初頭に属する大規模な溝が確認されている。灌漑水路と考えられるもので、段丘面の耕地開発の開始を物語るものである。

これらの溝は比較的短期間で役目を終え、新たに中小規模の水路による灌漑形態へと移行している。生産能力の成熟に伴うものであろう。14世紀末～15世紀初頭には一時的



第16図 岡田西遺跡 07-1 区地形図

に井戸による灌漑が行われるが再び水路を用いた灌漑形態へと戻っている。その後、近現代に至るまで連綿と耕作が続けられており、その間の土地利用に大きな変化がなかったことが、現代の地割と一致する耕作痕の方向より明らかである。

このように中世前半を画期として段丘の耕地開発が開始されたという状況は、中小路西遺跡などの調査成果<sup>④</sup>とも合致するもので、開発のおよんだ範囲がかなり広範囲であったことを示唆するものである。榎井川左岸における土地利用の変遷が具体的に明らかとなった意義は大きい。

## 第2節 07－1区の調査

### 1. 位置（第13、16図）

調査区は遺跡の南東部にあって、市道市場岡田線「中小路南」交差点の北西に接する地点である。現中小路集落の北西に広がる耕作地に含まれており、地形的には洪積段丘低位面に立地する。周辺では先の市道建設に伴う調査によって中世の耕作痕や井戸といった耕作関連遺構が確認されているほか、調査区の北西約200mに位置する00－1区<sup>④</sup>においても中世の耕作痕が確認されている。

現況は休耕地であり、擁壁および建物部分について8カ所のトレンチを設定した。

### 2. 層位と遺物の出土状況（PL. 4、11、12）

確認された層序は各トレンチともに概ね共通している。調査区のほぼ中央に位置する第2トレンチでは、灰黒色土（1層、約20cm）、淡灰褐色混じり暗橙色砂質土（2層、約10cm）、淡灰褐色砂質土（3層、約10cm）の各層が水平堆積し、さらに黄白色粘土（4層、約15cm）を経て、淡黄白色粘土の地山へと至る。このうち1～3層は現代耕作土と床土である。4層はマンガン粒の沈着が著しく、他のトレンチでは4層直上に旧耕作土である淡暗灰褐色土が確認される。先にみた市道部の調査では、旧耕作土上面において無数の耕作痕が確認されている。

地山である淡黄白色粘土は調査区東半にのみ分布し、西半では暗橙色礫混土による地山が確認された。安定した地山面がさほど広範囲には広がっていないものと考えられる。地山の標高は12.2mから11.7mを測り、大きくは東から西へと傾斜している。

地山上面において精査を行ったが、遺構は確認されず、またいずれの層位からも遺物は出土しなかった。

## 第3節 07－2区の調査

### 1. 位置（第13、17図）

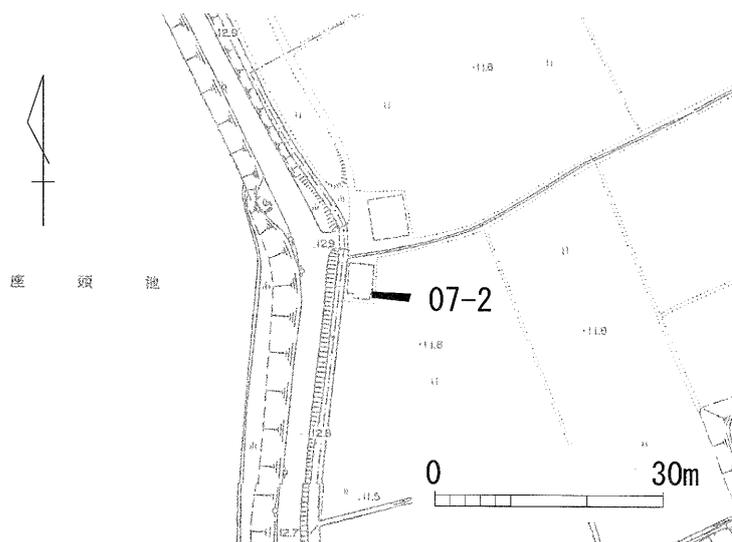
調査区は遺跡南西端にあって、府道堺阪南線「中小路南」交差点の南西約250m、遺跡の南西に位置する座頭池の東堤に接する地点である。地形的には洪積段丘低位面に属する。調査区は06－1区<sup>④</sup>として調査の行われた地点に含まれており、その際の調査では現耕土直下に地山が露呈するという結果が得られている。

現況は更地であり、トレンチは1カ所設定した。

## 2. 層位と遺物の出土状況

(PL. 4、12)

盛土（1層、約1.4m）を除去すると、灰黒色シルト（2層、約15cm）、灰褐色混じり橙色砂質土（3層、約20cm）が確認される。2層は現耕作土、3層は床土である。3層直下に地山である黄白色粘土が広がる。遺構、遺物は確認されなかった。06-1区と同様に現耕作土直下に地山が露呈することから、調査区一帯は大規模な削平を受けているものと考えられる。



第17図 岡田西遺跡 07-2 区地形図

- 註 ① 泉南市教育委員会『岡田西・氏の松遺跡群発掘調査報告書』（1995）  
② 泉南市教育委員会「岡田東遺跡 91-1 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 X』（1993）  
③ 泉南市教育委員会『海会寺-海会寺遺跡発掘調査報告書-』（1987）  
④ 泉南市教育委員会「中小路西遺跡 93-1 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 X I』（1994）  
泉南市教育委員会「中小路西遺跡 93-2 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 X II』（1995）  
⑤ 泉南市教育委員会「岡田西遺跡 00-1 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XIX』（2002）  
⑥ 平成 18 年度、泉南市教育委員会による発掘調査、『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XX V』（2008）に調査区位置掲載。

## 第6章 中小路西遺跡の調査

### 第1節 既往の調査 (PL. 1、2)

中小路西遺跡は市域の北東部、現在の中小路集落の西側に位置する。周辺は遺跡の分布密度が比較的高く、中小路北遺跡、中小路遺跡、坊主池遺跡、岡田西遺跡などが近接している。地形分類上は洪積段丘低位面に立地する。周辺は長らく耕作地として利用されていたが、遺跡のほぼ中央を縦断する市道市場岡田線の西側、遺跡の北西部においては宅地化が顕著である。

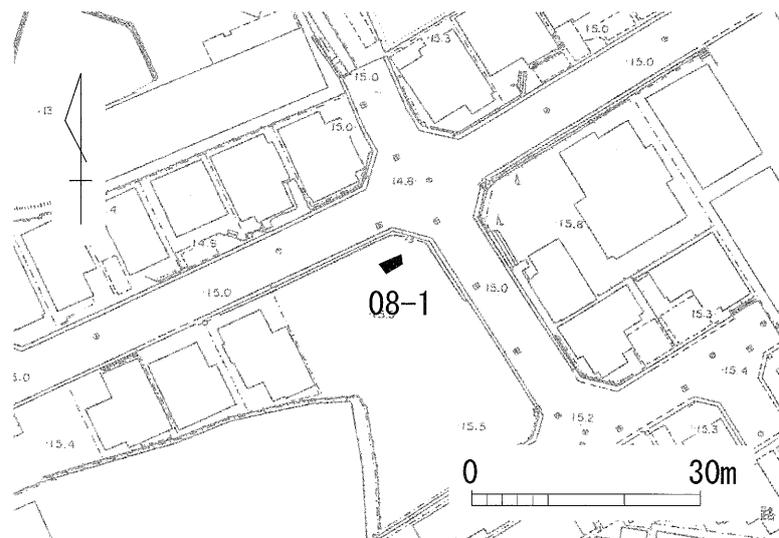
93年度以降、断続的に調査が実施されている。遺跡中央部西寄りに位置する93-1区<sup>①</sup>では灌漑水路と、水路廃絶に際し30点近い瓦器碗を意図的に埋めている状況が確認された。13世紀後半以降に廃棄されたものと思われ、岡田西遺跡<sup>②</sup>においてみられた大規模水路から中小規模水路への転換期と重なるものである。93-1区の北西約50mに位置する93-2区<sup>③</sup>においてもほぼ同時期と考えられる灌漑水路と多くの耕作痕が確認されている。これらは段丘開発の一端を知る貴重な手がかりとなるものであった。その後、特に93-2区周辺での調査が重ねられているが、その大半の地点で包含層である旧耕作土がすでに削平されており、盛土直下に地山が広がるといった状況である。しかしながら当遺跡が周辺の開発史を語るうえで欠かせないものであることには変わりなく、今後とも慎重にデータを積み重ねていく必要がある。

### 第2節 08-1区の調査

#### 1. 位置 (第13、18図)

調査区は遺跡の北西部にあって、府道堺阪南線「中小路」交差点の南約150mの地点である。先にみた93-2区を伴う宅地開発の行われた一画に含まれる。地形的には低位段丘に属する。南東約40mに93-2区が、同じく南東約100mに93-1区がそれぞれ位置するほか、南西約50mには本調査区と同一の宅地内において01-1区<sup>④</sup>などが位置する。01-1区では盛土直下に地山が露呈し、既に大きく削平を受けていることが明らかとなっている。

現況は更地であり、トレンチは1ヵ所設定した。



第18図 中小路西遺跡08-1区地形図

## 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 4、12)

宅地造成に伴う盛土（1層、約1m）以下、トレンチの北部でのみ淡灰褐色砂質土（2層、約5cm）がみられるものの、他の地点では地山である黄白色粘土が露呈する。宅地開発に伴って旧来の層位は大きく削平されているものと判断されるが、床土と考えられる2層を一部に残すことから地山面そのものへの影響は、さほど大きくはなかった可能性がある。地山面において遺構が確認された。

## 3. 遺構 (PL. 4、12)

確認された遺構は土坑 (SK01)、溝 (SD02) である。

土坑はトレンチの北西隅において部分的に検出されたため、全容は明らかでないが、現状では長軸を北西から南東方向へ向ける楕円形を呈し、長径1.1m、短径50cm、確認面よりの深さ40cmを測る。断面形状は逆台形に近く、かなりしっかりとした印象を受ける。埋土は2層であり、上から橙色混じり淡灰褐色砂質土と暗灰褐色砂質土である。遺物は出土しなかった。

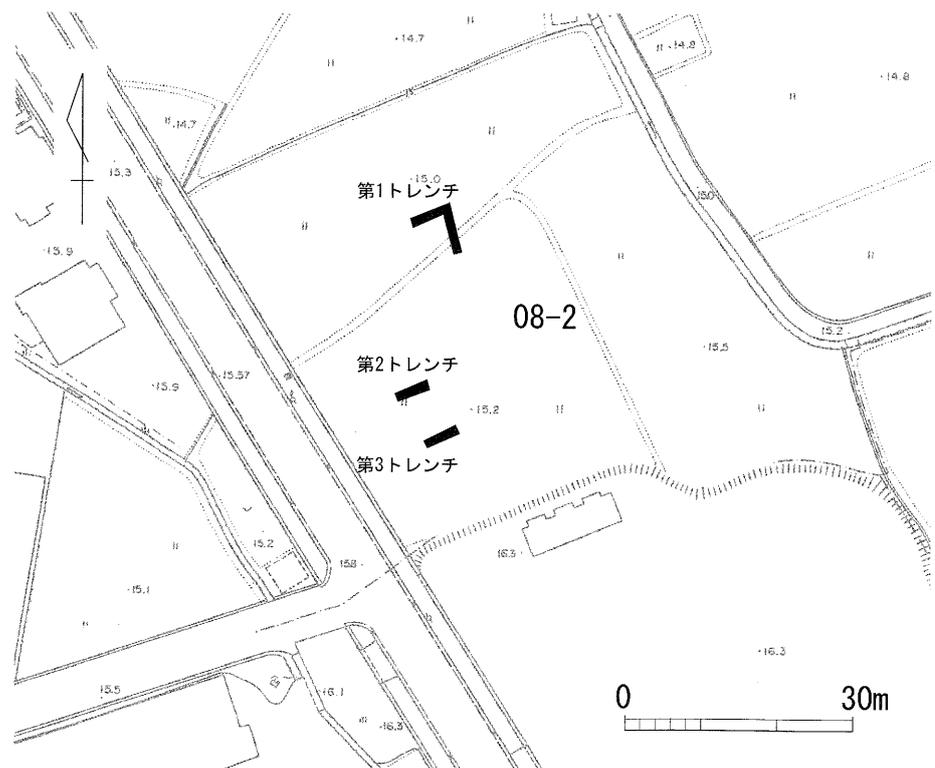
溝は長軸をN20°Eに向け、概ね直線的に伸びるもので、両端はトレンチ外へと伸びる。最大幅40cm、確認面よりの深さ20cmを測る。断面形状は浅い椀形を呈し、埋土は灰白色砂質シルトである。埋土には地山土のブロックを含む。遺物は出土しなかった。底部は平坦であり、南から北方向へ緩やかに傾斜している。

両遺構共に埋土の状況より耕作に関連するものである可能性が高い。遺物が出土しなかったため、時期的には明らかでないが、土坑埋土が2層に近似することから近現代の所作になる可能性がある。

## 第3節 08-2区の調査

### 1. 位置 (第13、19図)

調査区は遺跡の中央部にあつて、府道堺阪南線「中小路」交差点の南東約200m、現中小路集落の南西約300mに位置し、遺跡を南北に縦断する市道市場岡田線に東面する地点である。地形的には低位段丘に属する。調査区の南西約30mには93-1区が位置するが、既往の調査例



第19図 中小路西遺跡08-2区地形図

は市道の西側に集中しており、市道東側、つまり遺跡の東半部における調査例は少ない。

現況は駐車場跡地であり、全面がアスファルト敷きであった。トレンチは3ヵ所設定し、北から南へ第1～3トレンチと呼称する。

## 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 5、13)

確認された層位は各トレンチに共通する。盛土(1層、約60～70cm)以下、暗青灰色砂質シルト(2層、約20cm)および灰白色砂質シルト(3層、約5～15cm)がそれぞれ水平堆積を呈し、地山である黄白色粘土へと至る。2層は耕作土が還元したものと考えられ、3層は旧耕作土である。地山面において精査を行ったが遺構は確認されなかった。またいずれの層位からも遺物は出土しなかった。第1トレンチと第3トレンチでは地山面に約40cmの比高がみられ、北に向かって緩やかに傾斜している。

注 ① 泉南市教育委員会「中小路西遺跡93-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X I』(1994)

② 泉南市教育委員会『岡田西・氏の松遺跡発掘調査報告書』(1995)

③ 泉南市教育委員会「中小路西遺跡93-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X II』(1995)

④ 泉南市教育委員会「中小路西遺跡01-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X X』(2003)

## 第7章 北野遺跡・中小路遺跡の調査

### 第1節 既往の調査 (PL. 1、2)

調査区は北野遺跡と中小路遺跡にまたがる。市域北西部にあつて、地形的には共に低位段丘に属し、扇状に広がる低位段丘の南東縁部に北野遺跡が、その西隣に中小路遺跡が位置する。以下にそれぞれの概要を述べる。

北野遺跡は現信達大苗代集落の北に位置する。西端から北東を国道26号が横断し、西半には府道大苗代岡田浦停車場線が南北に縦貫する。府道の東側にあたる遺跡の中心部は工場や店舗として早くより開発が進んでいる。かえって北部や南西部は長らく耕作地として利用されてきたが、近年南西部における大規模な宅地開発が行われたことで、少しづつ景観が変わりつつある。

昭和50年代より調査が行われており、市内では最も早くより注目されてきた遺跡の一つであるが、そうした調査の大半は遺跡の中心部、府道大苗代岡田浦停車場線の東側に集中するものであった。遺跡南西部については先の宅地開発に伴う04-1区<sup>①</sup>が最初のものである。また近年は遺跡東端を限る「稲荷山」南西裾部、すなわち熊野街道<sup>②</sup>に面する地点における調査<sup>③</sup>も実施されているが、実態のある遺構、遺物の発見には至っていない。

遺跡北端にあたる新伝寺遺跡・北野遺跡04-1区<sup>④</sup>において奈良時代後半の掘立柱建物や土坑が確認されている。当該期の遺構は初出であり、市内においても海会寺跡と男里遺跡以外での遺構確認は初めてのことであった。集落の全容解明にはさらなるデータの蓄積が必要であるが、位置的にみても、調査区の南東約300mに位置する海会寺跡における古代集落<sup>⑤</sup>と無関係にあるとは考え難く、両者を有機的に関連付けて考察する必要がある。遺跡南西部に位置する04-2、3区において9世紀代の溝が確認されている<sup>⑥</sup>。溝の性格は不明であるが、周辺に集落が存在する可能性が高い。

平安時代後期には遺跡中央部に位置する55-7区<sup>⑦</sup>、91-1区<sup>⑧</sup>、99-3区<sup>⑨</sup>において掘立柱建物や井戸などが確認されている。特に91-1区で確認された掘立柱建物は7間×2間以上の規模を持つものが含まれ、当該期のものとしては市内でも数少ない大規模なものであった。このため集落の中心部であるとの評価が与えられていたが、さらに南西部における04-1区の調査においても大規模な溝が確認されるにおよんで、集落が予想以上に広範囲にわたるものであった可能性が生じている。周辺では海会寺跡において12世紀末には寺院復興<sup>⑩</sup>がなされ、遺跡の北東約250mには熊野九十九王子の一つ、厩戸王子が置かれるなど、平安時代末期に熊野街道周辺の整備が進んだことが知られる。こうした周辺遺跡の動向と、本遺跡にみられる平安時代集落とは時期的にも隔たっており、両者が直接的に結びつくものとの確証は得られないが、近隣に前代からの集落が存在したことが、熊野詣盛期における周辺の整備の礎となった可能性は否定できない。

中世には04-1区や05-1区<sup>⑪</sup>において14世紀代の野井戸が確認されている。周辺の耕地開発の進展を示すもので、南に隣接する大苗代遺跡<sup>⑫</sup>との関連が覗えるものである。

中小路遺跡は現中小路集落の南に広がる耕作地にあたる。市域でも遺跡分布の密な地域にあり、北に中小路北遺跡、南に中小路南遺跡、東に北野遺跡、西に中小路西遺跡が位置している。地目が耕作地であることから調査件数が少なく、これまでに遺跡の中央部と東縁部において2件の調査が行われ

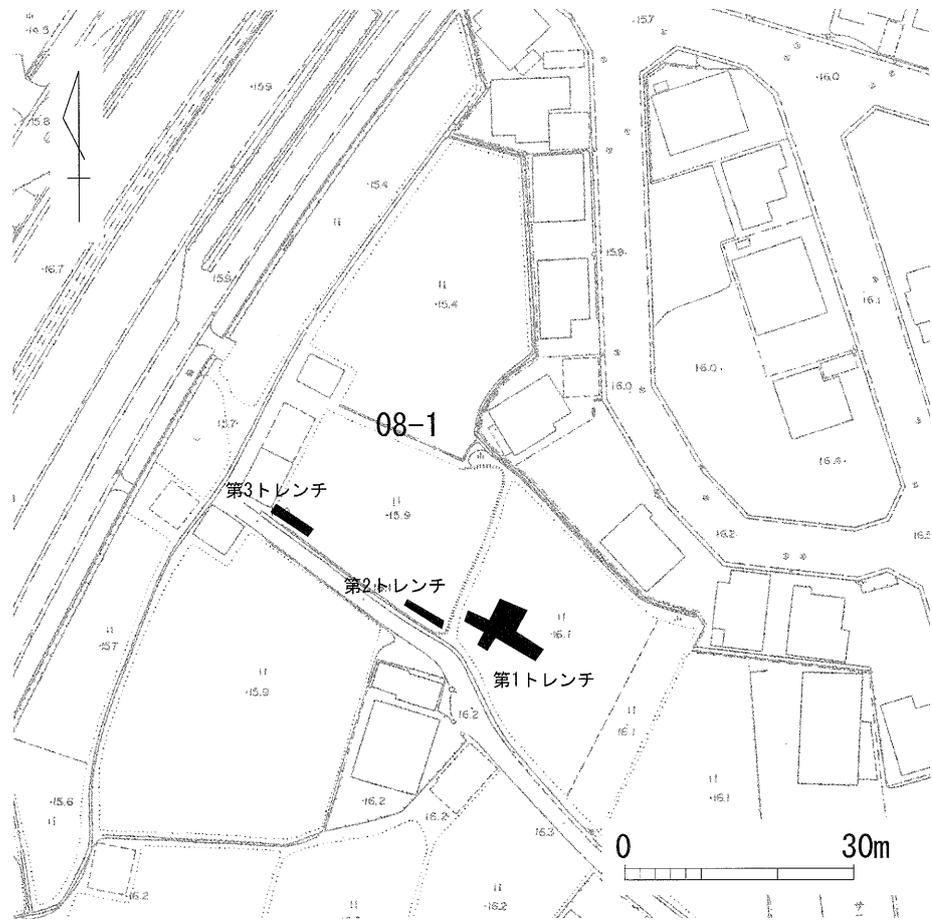
たのみである。うち東縁部に位置する 96 - 1 区<sup>®</sup>では複数の耕作面が確認されている。

## 第 2 節 08 - 1 区の調査

### 1. 位置 (第 13、20 図)

調査区は北野遺跡南西縁、中小路遺跡の南東縁にあつて、国道 26 号「大苗代西」交差点の南西約 150 m、現信達大苗代集落の北西に広がる耕作地に位置する。地形的には低位段丘に属する。調査区東隣に北野遺跡 04 - 1 区が位置し、調査区の北西約 50 m、国道 26 号を挟んだ地点には中小路遺跡 92 - 1 区が位置する<sup>®</sup>。

現況は旧耕地であり、トレンチは 3 カ所設定した。南から北へ第 1 ~ 3 トレンチと呼称する。



第 20 図 北野遺跡・中小路遺跡 08-1 区地形図

### 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 5、13、14)

第 1 トレンチでは現代耕作土である淡灰黒色土 (1 層、約 20 cm) 以下、暗黄褐色混じり淡灰褐色砂質土 (3 層、約 10 cm)、淡灰褐色砂質土 (4 層、約 10 cm)、暗黄灰色砂質土 (5 層、約 5 cm) がそれぞれ水平堆積を呈し、地山である淡橙白色粘土や暗橙色砂質粘土へと至る。トレンチの東端にのみ地山直上に淡褐色砂質シルト (6 層、約 20 cm) が存在する。3、4 層は床土および旧耕作土である。トレンチ北西部では耕作に関連するものと考えられる落ち込みが断面確認される。地山のうち暗橙色砂質粘土は粘性が非常に強く、周辺では北野遺跡のほか大苗代遺跡や仏性寺跡においても確認されるものである<sup>®</sup>。地山の状況は概ね平坦であり、標高は約 16.1 m を測る。地山面において遺構が確認された。

第 2 トレンチでは、淡灰黒色土 (1 層、約 20 cm) 以下、暗黄褐色混じり淡灰褐色砂質土 (2 層、約 10 cm)、淡灰褐色砂質土 (3 層、約 15 cm)、暗黄灰色砂質土 (4 層、約 5 cm) がいずれも水平堆積を呈し、褐

灰色礫混シルト（5層、約20cm）をはさんで地山である暗橙色礫混粘土へと至る。1層から4層は第1トレンチと共通し、現代耕作土および床土、旧耕作土である。地山は平坦であり、標高は約15.9mを測る。遺構は確認されなかった。

調査区の北端に位置する第3トレンチでは、1層から4層までは第1、2トレンチと共通するものであり、4層以下、灰褐色砂質シルト（6層、約5cm）、暗灰褐色礫混シルト（7層、約15cm）、暗灰褐色礫混シルト（8層、約15cm）を経て、暗橙色礫混粘土へと至る。6～8層は自然堆積であり、7、8層にはクサリ礫、円礫を多く含む。地山の標高は約15.7mを測り、調査区が南から北へと緩やかに傾斜していることがわかる。遺構は確認されなかった。

以上、各トレンチの層位のうち、第2トレンチの5層にわずかに土師器細片が含まれるほか、遺物は出土しなかった。

### 3. 遺構 (PL. 5、13)

第1トレンチにおいて部分的に遺構が確認されたため、トレンチを拡張し全容の究明に努めた。最終的にピット18基、溝3条が確認された。

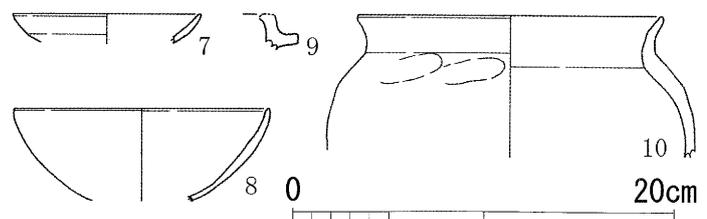
ピットはトレンチのほぼ全域に分布するが、北側の拡張部にやや集中している。埋土によって大きく2つに分類することが可能であった。図版中にトーンにて表示したものは旧耕作土を埋土とするもので、7基確認されている。直径20cm前後の円形または楕円形を呈し、確認面よりの深さは3～20cmを測る。ピットには明確な配置を見出すことが出来ず、また旧耕作土が埋土であることから、耕作に関連する杭穴等と考えられる。Pit05の埋土から遺物（9）が出土している。

もう一方の一群は褐灰色砂質シルトを埋土とするもので、11基確認された。いずれも直径20～50cmを測る円形または楕円形を呈し、深さは7～26cmを測る。柱痕は確認されなかった。これらピット群は明瞭なまとまりを持たず、現状では掘立柱建物として復元されるものはないが、柱列を構成する可能性のあるものとしてPit01、02とその延長上において断面観察により判明したPit03がある。軸をN30°Eに向け、芯々間の距離は各々1.6mを測る。Pit04の埋土から遺物（8、10）が出土している。この柱列に対応する桁行ないし梁間方向のピットは確認されていない。

溝は3条確認されたが、いずれも浅く短いもので、その性格は不明である。最も規模の大きいSD06は長軸を南東から北西へ向けて蛇行するものである。長さ1.7m以上、最大幅30cm、深さ5cmを測る。埋土は褐灰色砂質シルトであり、遺物（7）が出土している。

### 4. 遺物 (PL. 15、第21図)

第1トレンチより出土した遺物には黒色土器、土師器、土師質土器がある。7はSD06より出土した土師器小皿である。底部を欠くが、緩やかに内湾しつつ立ち上がる体部を持ち、口縁端部は丸く収める。乳白色を呈する製品。8はPit04より出土した黒色土器A類椀である。内湾しつつ大きく開く体部を持ち、口縁端部は丸く収める。



第21図 北野遺跡・中小路遺跡 08-1 区出土遺物

摩滅のため、調整は不明である。9はPit05より出土した土師質土釜である。水平に巡る幅狭の鏝と、わずかに内傾しつつ直線的に立ち上がる短い口縁よりなる。口縁端部は内側に折り曲げ屈曲させる。明褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。搬入品か。10はPit04より出土した土師器甕である。体部と肩部の境が緩やかに屈曲し、ハ字状に開く口縁にわずかに外反する端部を持つ。摩滅が激しいが、頸部から肩部に指頭圧痕がみられる。

- 註 ① 平成16年度、泉南市教育委員会による調査、『泉南市遺跡群発掘調査報告書X X II』（2005）にトレンチ位置掲載。また本文中にあるのはその後の本調査の成果による。
- ② 大阪府教育委員会『熊野・紀州街道一論考編一』（1987）
- ③ 泉南市教育委員会「北野遺跡00-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X VIII』（2001）  
泉南市教育委員会「北野遺跡01-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X IX』（2002）
- ④ 泉南市教育委員会「新伝寺遺跡・北野遺跡04-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X X II』（2005）
- ⑤ 泉南市教育委員会『海会寺-海会寺遺跡発掘調査報告書』（1987）
- ⑥ 泉南市教育委員会「北野遺跡04-2、3区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X X III』（2006）
- ⑦ 泉南市教育委員会「55-7地区」『男里遺跡発掘調査報告書II』（1981）
- ⑧ 泉南市教育委員会『北野遺跡発掘調査報告書』（2003）
- ⑨ 泉南市教育委員会「北野遺跡99-3区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X IX』（2002）
- ⑩ ⑤と同じ。
- ⑪ 泉南市教育委員会「北野遺跡05-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X X III』（2006）
- ⑫ 泉南市教育委員会『大苗代遺跡発掘調査報告書』（2002）
- ⑬ 泉南市教育委員会「中小路遺跡96-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X IV』（1997）
- ⑭ 平成4年度、泉南市教育委員会による発掘調査、遺構、遺物は確認されていない。『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』（1993）にトレンチ位置記載。
- ⑮ 泉南市教育委員会『大苗代遺跡発掘調査報告書』（2002）  
泉南市教育委員会「仏性寺跡07-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X X V』（2008）など。

## 第8章 仏性寺跡の調査

### 第1節 既往の調査 (PL. 1、2)

仏性寺跡は市域平野部の東部に位置し、現信達大苗代集落の西に広がる耕作地をその範囲とする。地形的には平野部の大半を占める低位段丘上に立地している。

仏性寺跡は、建武3(1336)年淡輪重氏の軍忠状に「信達莊仏性寺」とみえ、その後根来寺支配下にあったことが永喜元(大永6・1526)年の信達莊納帳より推測される<sup>①</sup>。天正5(1577)年、織田信長の雑賀攻めに際し、焼き討ちされたとの伝承を持つが詳細は明らかでない。しかしながら、こうした断片的な記録や伝承に加え、現在も遺跡中央部周辺には「ダイモン」や「ヤクシドウ」といった小字が残ることから、市内でも比較的早くから周知されてきた遺跡の一つである。

これまで遺跡中央部を東西に横断する市道赤井神社線の沿道を中心に数件の調査が行われているが、遺跡の内容究明には至っていない。遺跡中央に位置する87-1区では中世の庭園遺構の可能性のある石積や配石遺構が確認され、中世期の瓦が多く出土した<sup>②</sup>。遺跡西端にあたる55-8区では、中世前半と後半に該当する2面の遺構面が確認されている<sup>③</sup>。

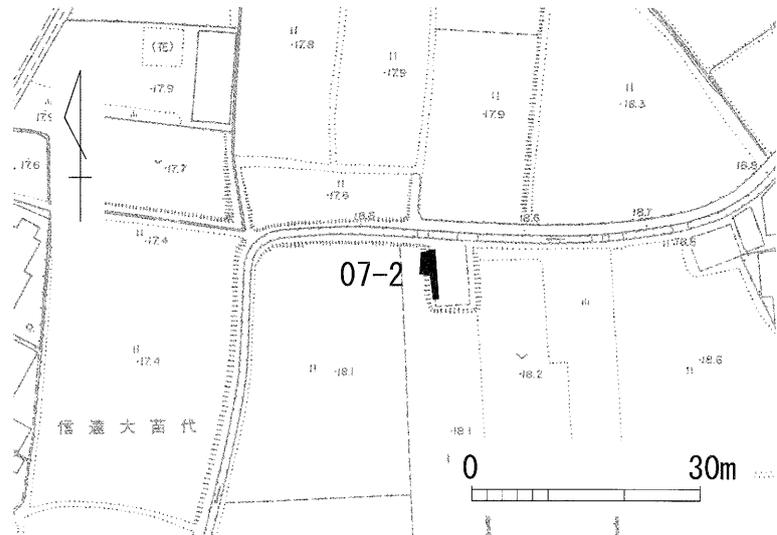
考古学的には寺域はもとより、創建時期の推測すら困難な状況ではあるが、地道にデータを蓄積することによってこうした問題を究明していかなければならない。

### 第2節 07-2区の調査

#### 1. 位置 (第13, 22図)

調査区は遺跡の北部にあって、国道26号「市場北2番」交差点の東約150mに位置する。現信達大苗代集落の西に広がる耕作地に含まれ、地形的には洪積段丘低位面に属する。周辺では調査区の西約30mに位置する07-1区<sup>④</sup>をはじめ、大苗代遺跡91-3、91-4区<sup>⑤</sup>など、数件の調査が行われているが、いずれも明確な遺構、遺物の確認には至っていない。

現況は耕作地であり、トレンチは1カ所設定した。



第22図 仏性寺跡07-2区地形図

#### 2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 5、14)

現耕作土および床土である灰黒色土(1層、約20cm)、暗橙色砂質土(2層、約20cm)以下、淡灰

白色砂質シルト（3層、約10cm）、暗黄褐色混じり灰白色粘土（4層、約40cm）と続き、地山である暗橙色礫混土へと至る。3層は旧耕作土であり、4層については自然堆積によるものと考えられる。地山上面で遺構が確認された。トレンチ北端部において確認されたもので、一部トレンチを拡張し、全容の把握に努めた。

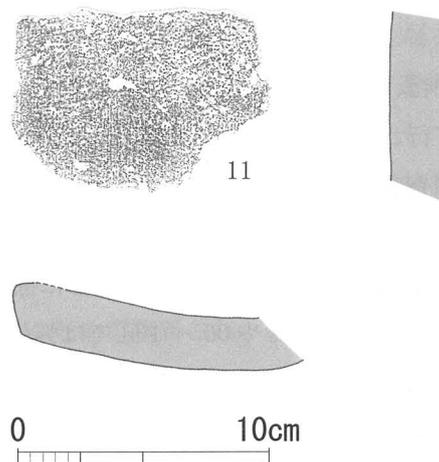
### 3. 遺構 (PL. 5、14)

確認された遺構は溝である。長軸をほぼ東西に揃える直線溝であり、検出長1.5m、幅50cm、確認面よりの深さ40cmを測る。断面形状はU字形を呈するが、本来は漏斗状に大きく

開くものであったことが断面において確認される。切り込み面は旧耕作土である3層上面である。埋土は上部が淡暗褐色粘土、下部が暗灰白色礫混粘土である。暗灰白色礫混粘土には20cm以下の円礫が多量に含まれていることから、石詰めの暗渠であったものと考えられる。同層からは中世の瓦が2点出土した。

### 4. 遺物 (PL. 15、第23図)

上述のようにSD01からは平瓦と丸瓦が1点ずつ出土したが、丸瓦については図示することが出来なかった。11は平瓦である。凹凸両面に離れ砂が顕著に付着する。凸面には糸切痕を残す。側端を面取りの後、凹面側端縁を丁寧にナデ調整している。瓦質の製品であり、胎土に黒色砂粒を多く含む。



第23図 仏性寺跡 07-2 区出土遺物

- 註 ① 仲村 研「古代・中世」『泉南市史 通史編』泉南市（1987）  
 ② 泉南市教育委員会「仏性寺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書V』（1988）  
 ③ 泉南市教育委員会「55-8地区」『男里遺跡発掘調査報告書』（1981）  
 ④ 泉南市教育委員会「仏性寺跡 07-1 区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XXV』（2008）  
 ⑤ 平成3年度、泉南市教育委員会による発掘調査、共に遺構、遺物は確認されていない。  
 『新伝寺遺跡 91-1 区・幡代遺跡 03-3 区発掘調査報告書』（2004）にトレンチ位置掲載。

## 第9章 まとめ

本書では、平成20年1月1日より同12月31日までの間に、文化財保護法に基づく発掘届出等に基づいて行われた個人住宅等に伴う発掘調査および確認調査、18件について報告している。以下にこれらの調査成果を概観し、今年度のまとめとしたい。

男里遺跡では今年度7件の調査を実施し、昨年度未報告の3件を合わせて報告することができた。08-1区、07-8、9区は遺跡南端部に位置する。08-1区の周辺では近年特に調査が集中して行われており、05-8区や06-1区では弥生時代中期の遺物が多量に出土し、自然流路を利用した遺構等であるとの指摘がなされている<sup>④</sup>。本調査区においても同様の成果が期待されたものであるが、結果、弥生時代の遺構はもとより遺物も全く出土しなかった。弥生時代の遺構範囲が画一的に広がるものではないことが裏付けられた。また調査では旧耕作土以下に河川性堆積による砂礫層が確認され、調査区を含む広い範囲に氾濫原が広がっていることが再確認された。唯一出土した中世土器に関しては、調査区の北東約100m、府道金熊寺男里線に関連して調査の行われた地点<sup>⑤</sup>との関連を伺えるものであろう。07-8区ではやや不安定な状況を示すもののシルト質の地山が確認されている。遺構は検出されなかったが、地山直上層が弥生時代包含層である可能性が指摘されることから、周辺への遺構の広がり期待されるものである。07-9区では河川性堆積を示す砂礫層が分厚く堆積していることが確認された。地形的に氾濫原もしくは段丘上の谷であるものと考えられるが、旧耕作土も存在しなかったことからすると、長らく沼地状に澱んだ状態であったものと考えられる。

08-2区は現馬場集落西端に位置する。第1トレンチより弥生時代の飯蛸壺がまとまって出土した。調査範囲が狭く、確定的なことは言えないが、トレンチ外へと広がる大きな遺構である可能性が高いものと推測される。というのも時期的に異なるものも含め、飯蛸壺以外の遺物は全く出土していないこと、遺物の残存状態が良好で、完形近くに復元されるものがほとんどであるといった特徴を示すためである。調査区の南方約150mに位置する弥生時代集落の調査においても「大溝1」より同形態の飯蛸壺がまとまって出土<sup>⑥</sup>していることから、本調査区の蛸壺群のあり方は注目し得るものである。これらが遺構に伴うものであるとの前提に立てば、集落に近接したものとしては北限のものとなる。

08-3区はいわゆる「信長街道」<sup>⑦</sup>に面することは文中にも述べたが、地形的には街道を境として北側が1段低くなっており、確認される遺構の内容が大きく異なることが確かめられている。調査では安定したシルト面は存在するものの、遺構はもとより遺物も出土しないことが明らかとなった。ほぼすべての地点において黒褐色系土層が厚く堆積することから、かつては湿地状態であったと考えられる。同様に08-4、5区においても黒褐色系土層が存在し、直下に若干不安定な状況を示す地山が確認された。共に遺構、遺物が確認されないことから、活動には適さない土地であったものと考えられる。しかし08-5区に近接する95-2区<sup>⑧</sup>において黒褐色系土層をベースとした平安時代集落が確認されており、地形的条件だけで遺構の有無を断定できるわけではない。今後は黒褐色系土層の分析とより詳細な精査が求められよう。遺跡北端に位置する08-7区においても黒褐色系土層が確認された。不安定な状況を示す地山の起伏に合わせて堆積しており、不定形の土坑として検出することができた。自然地形もしくは風倒木等と考えることが可能である。調査区の南東約200mに位置する地点においても同様の土坑が多数確認されている<sup>⑨</sup>。08-6区は遺跡北部にあって、地形的には旧

河道に属すると考えられてきた地点である。基盤層と捉えることが可能な粘土層の直上に、複数の還元色を呈する層位が確認された。肩が未確認であり規模などの詳細は不明であるが、粘土層をベースとする自然流路である可能性が高い。07－10区においては遺構は確認されなかったが、遺構ベースとなり得るシルト層を確認することができた。氾濫原を構成する砂礫層の直上に堆積したもので、地点によって層厚にばらつきがあるものの、非常に安定した状況を呈しており、周辺での遺構発見に期待が持たれるものであった。

本田池遺跡では1件の調査を報告している。低位段丘上に立地する本遺跡では、過去の調査例が少なく、その動向が注目された。調査では現代の床土層直下に地山が確認され、調査区は既に大きく改変されていることが明らかとなった。

座頭池遺跡では1件の調査を報告している。本田池遺跡と同様に過去の調査例は少ないが、立地的に周辺遺跡との関連が注目されるものであった。2m近くの盛土が確認され、調査区は大きく改変されていることが明らかとなった。

岡田西遺跡では昨年度未報告の2件の調査について報告することができた。07－1区では、中世耕作面が良好に検出された東隣接地<sup>⑥</sup>と共通する層位を確認することができたが、水路や耕作痕といった遺構は確認されなかった。遺跡西端に位置する07－2区においては現代床土層の直下に地山が確認され、調査区は既に大きく改変されていることが明らかとなった。

中小路西遺跡では2件の調査を報告している。08－1区では時期的に異なる可能性のある土坑と溝が確認された。共に耕作関連の所作にかかるものと考えることができ、土坑埋土が近現代のものと考えられ、溝はそれを遡るものと判断される。08－2区では旧耕作土直下に地山が確認された。遺構は確認されなかったが、調査区は長期的に耕作地であったことがわかる。

北野遺跡・中小路遺跡08－1区では柱列を構成する可能性のあるピット群が確認された。出土遺物が少なく断定的な資料とは言えないが、10世紀代に属する可能性が高い。北野遺跡の既往の調査によって知られる集落範囲をさらに西へ広げる結果となった。

仏性寺跡では昨年度未報告の1件について報告している。07－2区では東西へ伸びる直線溝が確認された。石詰暗渠であったものと考えられ、断面観察によって恐らくは近世以降に属するものと推定される。中世瓦が出土しており、中世仏性寺そのものを伺い知る貴重な手掛りを得ることができた。

註 ① 泉南市教育委員会「男里遺跡06－1区、05－8区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X XIV』（2007）

② （財）大阪府文化財センター『男里遺跡』（2005）

③ ②と同じ。

④ 大阪府教育委員会『熊野・紀州街道一調査報告編一』（1987）

⑤ 泉南市教育委員会「男里遺跡95－2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X III』（1996）

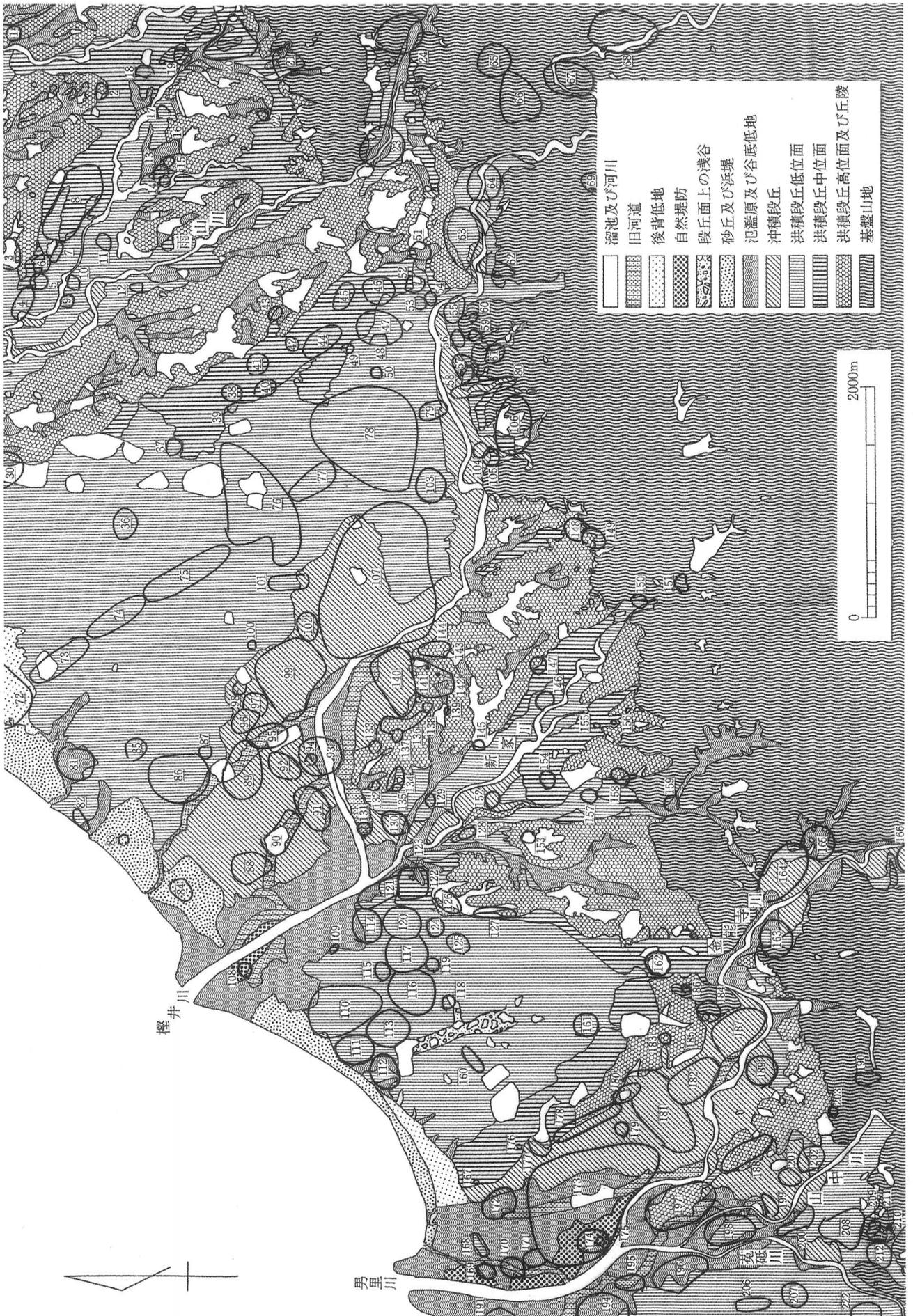
⑥ （財）大阪府埋蔵文化財協会『男里遺跡』（1994）

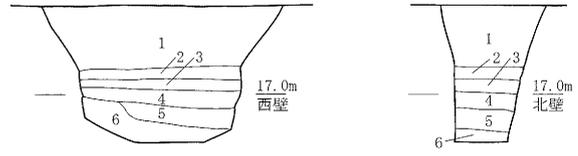
⑦ 泉南市教育委員会『岡田西遺跡・氏の松遺跡発掘調査報告書』（1995）

第5表 文化財一覧表

1	正法寺跡	47	野々宮遺跡	93	樫井城跡	139	引谷池窯跡	185	林昌寺瓦窯跡
2	小垣内遺跡	48	総福寺天満宮本殿	94	奥家住宅	140	兎田遺跡	186	林昌寺銅鑄出土地
3	大谷池遺跡	49	宮ノ前遺跡	95	道ノ池遺跡	141	フキアゲ山東遺跡	187	岡中遺跡
4	大久保B遺跡	50	垣外遺跡	96	岡ノ崎遺跡	142	フキアゲ山1号墳	188	高田山古墳群
5	下高田遺跡	51	屯田遺跡	97	中菖蒲遺跡	143	フキアゲ山2号墳	189	岡中西遺跡
6	紺屋遺跡	52	八王子遺跡	98	岸ノ下遺跡	144	兎田古墳群	190	雨山南遺跡
7	口無池遺跡	53	慈眼院金堂・多宝塔	99	諸目遺跡	145	池尻遺跡	191	福島遺跡
8	東門寺跡	54	日根神社遺跡	100	城ノ塚古墳	146	中の川遺跡	192	尾崎海岸遺跡
9	降井家屋敷跡	55	西ノ上遺跡	101	禅興寺跡	147	岩の前遺跡	193	馬川北遺跡
10	大久保C遺跡	56	川原遺跡	102	ダイジョウ寺跡	148	別所北遺跡	194	馬川遺跡
11	中家住宅	57	母山遺跡	103	上之郷遺跡	149	別所遺跡	195	下出北遺跡
12	大久保A遺跡	58	母山近世墓地	104	向井代遺跡	150	高野遺跡	196	室堂遺跡
13	五門北古墳	59	向井山遺跡	105	意賀美神社本殿	151	昭和池遺跡	197	平野寺(長楽寺)跡
14	五門遺跡	60	鏡塚古墳	106	向井池遺跡	152	上村遺跡	198	向出遺跡
15	五門古墳	61	梨谷遺跡	107	三軒屋遺跡	153	狐池遺跡	199	高田西遺跡
16	大浦中世墓地	62	笹ノ山遺跡	108	川原遺跡	154	上野中道遺跡	200	向山遺跡
17	大浦遺跡	63	土丸遺跡	109	岡田東遺跡	155	宮遺跡	201	高田南遺跡
18	甲田家住宅	64	土丸南遺跡	110	岡田遺跡	156	宮南遺跡	202	和泉鳥取遺跡
19	久保B遺跡	65	雨山城跡	111	氏の松遺跡	157	芋掘遺跡	203	雨山遺跡
20	鳥羽殿城跡	66	土丸城跡	112	<b>座頭池遺跡</b>	158	石ヶ原遺跡	204	内畑遺跡
21	墓の谷遺跡	67	下大木遺跡	113	<b>岡田西遺跡</b>	159	高倉山南遺跡	205	皿田池古墳
22	来迎寺本堂	68	大木遺跡	114	新伝寺遺跡	160	<b>本田池遺跡</b>	206	正方寺遺跡
23	池ノ谷遺跡	69	稲倉池北方遺跡	115	中小路北遺跡	161	上代石塚遺跡	207	西畑遺跡
24	成合寺遺跡	70	大西遺跡	116	<b>中小路西遺跡</b>	162	信之池遺跡	208	自然田遺跡
25	山ノ下城跡	71	松原遺跡	117	<b>中小路遺跡</b>	163	滑瀬遺跡	209	玉田山遺跡
26	山出遺跡	72	中開遺跡	118	坊主池遺跡	164	六尾遺跡	210	玉田山古墳群
27	上瓦屋遺跡	73	末廣遺跡	119	中小路南遺跡	165	六尾南遺跡	211	玉田山須兵器窯跡
28	湊遺跡	74	安松遺跡	120	<b>北野遺跡</b>	166	金熊寺遺跡	212	寺田山遺跡
29	壇波羅密寺跡	75	長滝遺跡	121	一岡神社遺跡	167	専徳寺遺跡	213	黒田西遺跡
30	壇波羅遺跡	76	植田池遺跡	122	海会寺跡	168	天神ノ森遺跡	214	鳥取北遺跡
31	佐野王子跡	77	郷ノ芝遺跡	123	海会寺瓦窯	169	キレット遺跡	215	鳥取遺跡
32	上町東遺跡	78	日根野遺跡	124	大苗代遺跡	170	高田遺跡	216	鳥取南遺跡
33	市場東遺跡	79	机場遺跡	125	<b>仏性寺跡</b>	171	男里北遺跡	217	黒田南遺跡
34	若宮遺跡	80	棚原遺跡	126	海宮宮池遺跡	172	戎畑遺跡	218	神光寺(蓮池)遺跡
35	上町遺跡	81	羽倉崎東遺跡	127	市場遺跡	173	<b>男里遺跡</b>	219	三味谷遺跡
36	俵屋遺跡	82	羽倉崎遺跡	128	向井山遺跡	174	光平寺跡	220	三升五合山遺跡
37	北尻遺跡	83	嘉祥神社本殿	129	新家遺跡	175	光平寺石造五輪塔	221	小口谷遺跡
38	岡口遺跡	84	道ノ池遺跡	130	下村遺跡	176	樽井南遺跡	222	井関遺跡
39	中嶋遺跡	85	羽倉崎上町遺跡	131	下村北遺跡	177	男里東遺跡	223	石田山遺跡
40	小塚遺跡	86	船岡山遺跡	132	下村1号墳	178	長山遺跡	224	西鳥取遺跡
41	十二谷遺跡	87	岡本廃寺	133	新家オドリ山東遺跡	179	山ノ宮遺跡	225	戎遺跡
42	丁田遺跡	88	田尻遺跡	134	新家オドリ山遺跡	180	前田池遺跡	226	貝掛遺跡
43	新池尻遺跡	89	船岡山南遺跡	135	下村2号墳	181	幡代遺跡	227	金剛寺遺跡
44	大坪遺跡	90	夫婦池遺跡	136	新家古墳群	182	幡代南遺跡	228	塚谷古墳群
45	市堂遺跡	91	樫井西遺跡	137	新家オドリ山南遺跡	183	奥ノ池遺跡		
46	北ノ前遺跡	92	藤波遺跡	138	フキアゲ山西遺跡	184	林昌寺跡		

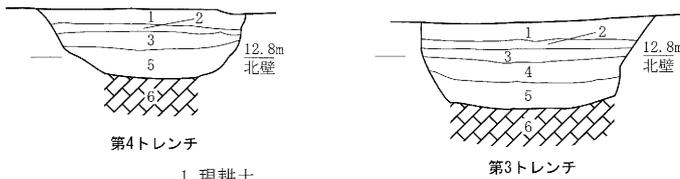






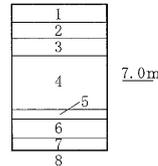
- 1. 盛土
- 2. 暗灰色シルト (耕作土)
- 3. 淡灰褐色混じり暗褐色砂質シルト (床土)
- 4. 淡灰褐色混じり暗褐色砂質シルト (旧耕作土)
- 5. 淡暗褐色砂
- 6. 淡暗褐色礫混土

ON08-1区断面図



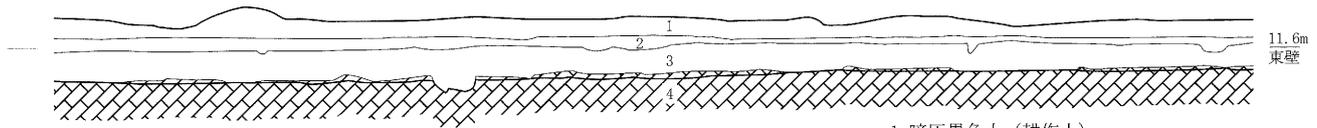
- 1. 現耕土
- 2. 赤褐色砂質シルト (床土)
- 3. 褐色砂質シルト
- 4. 暗黄褐色粘性シルト
- 5. 暗褐色粘性シルト (ケラレキ多量混入)
- 6. 暗黄褐色粘性シルト (ケラレキ多量混入)

ON08-2区断面図



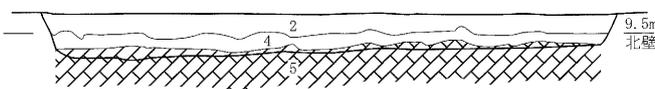
- 1. 灰黒色シルト (耕作土)
- 2. 橙灰色土 (床土)
- 3. 橙色混じり淡灰褐色砂質土 (旧耕作土)
- 4. 暗褐色砂質シルト (ケラレキ少含)
- 5. 淡暗灰褐色砂質シルト
- 6. 暗青灰色シルト
- 7. 暗青灰色砂礫
- 8. にぶい暗黄褐色～暗青灰色粘土

ON08-6区層序模式図



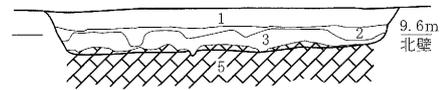
ON08-3区第2トレンチ断面図

- 1. 暗灰黒色土 (耕作土)
- 2. 暗橙色混じり淡灰褐色砂質土 (床土)
- 3. 暗褐色シルト (礫僅含)
- 4. にぶい黄褐色シルト

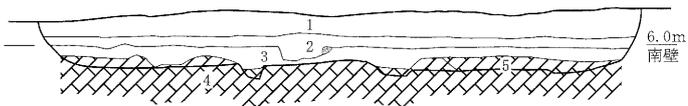


- 1. 暗灰褐色砂質土 (耕作土)
- 2. 褐色混じり暗灰褐色砂質土 (旧耕作土)
- 3. 淡暗褐色シルト (地山br. 少含)

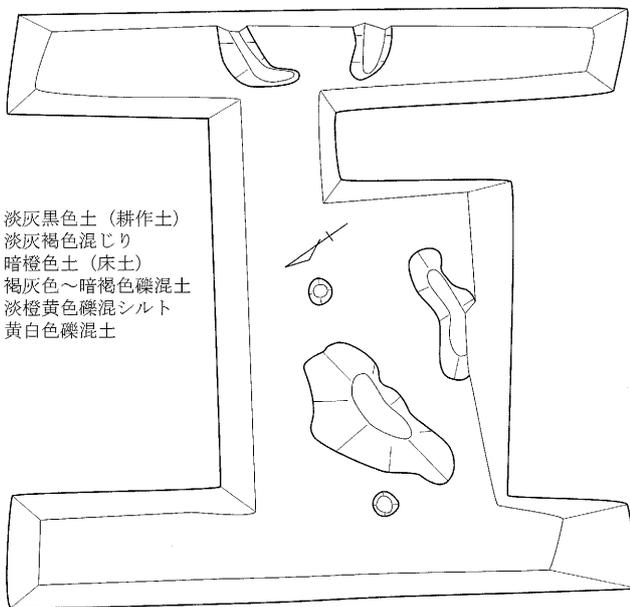
ON08-4区断面図



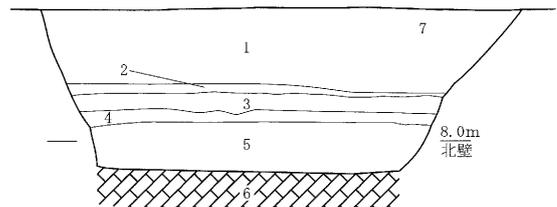
- 4. 暗褐色礫混シルト
- 5. にぶい黄褐色シルト



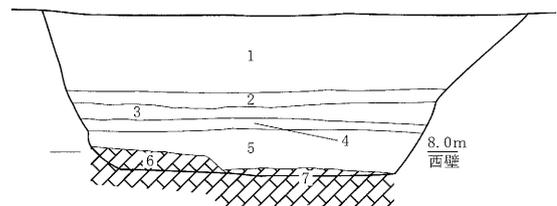
- 1. 淡灰黒色土 (耕作土)
- 2. 淡灰褐色混じり暗橙色土 (床土)
- 3. 褐灰色～暗褐色礫混土
- 4. 淡橙黄色礫混シルト
- 5. 黄白色礫混土



ON08-7区平面図および断面図



第1トレンチ



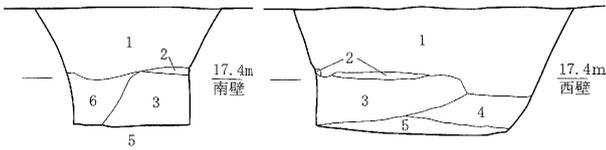
第2トレンチ

- 1. 盛土
- 2. 灰色砂質土 (耕作土)
- 3. 淡灰褐色混じり暗橙色砂質土 (床土)
- 4. 淡灰褐色砂質土 (旧耕作土)
- 5. 暗褐色シルト (ケラレキ少含)
- 6. 暗褐黄灰色礫混土
- 7. にぶい黄灰色シルト

ON08-5区断面図

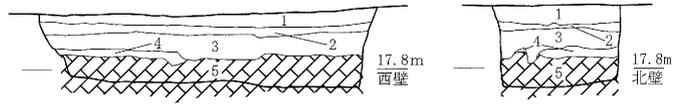


PL. 4 男里遺跡②、本田池遺跡、座頭池遺跡、岡田西遺跡、中小路西遺跡①調査区



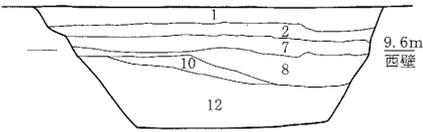
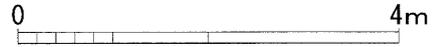
1. 盛土
2. 暗橙色混じり暗灰褐色砂質土 (旧耕作土)
3. 暗褐色礫混土
4. 暗灰色礫混シルト
5. 暗灰色砂礫
6. 褐色混じり暗灰色礫混シルト

ON07-9区断面図

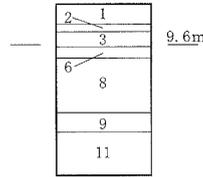


1. 暗灰黒色土 (耕作土)
2. 淡灰褐色混じり淡橙色砂質シルト (床土)
3. 淡灰褐色砂質土 (旧耕作土)
4. 暗褐色灰色シルト
5. にぶい黄褐色シルト

ON07-8区断面図

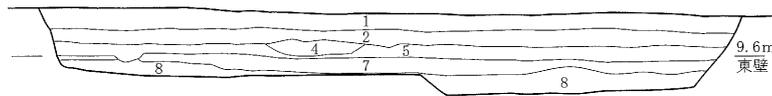


第2トレンチ



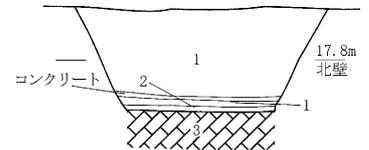
第1トレンチ

1. 灰黒色土 (耕作土)
2. 暗橙色混じり暗灰褐色砂質土 (床土)
3. 灰褐色砂質シルト (旧耕作土)
4. 淡灰褐色礫混砂質土 (褐色および5層ブロック多含)
5. 黄灰色砂質土 (Mg粒多含、旧耕作土)
6. にぶい灰黄色土 (Mg粒含、旧耕作土)
7. 暗灰褐色混じり淡暗褐色シルト
8. 褐色混じりにぶい黄灰色シルト
9. 灰黄褐色礫混粘土
10. 暗黄灰色礫混土
11. 淡褐色砂礫
12. 暗灰褐色粗砂



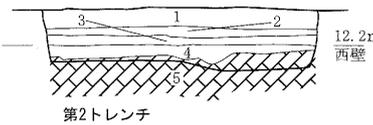
第3トレンチ

ON07-10区断面図および層序模式図



1. 盛土
2. 淡橙色砂質シルト (床土)
3. 黄白色砂質シルト (Mg粒、ケリ粒多含)

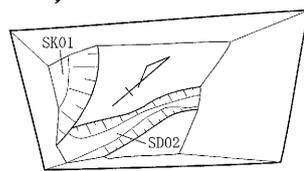
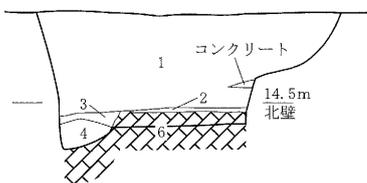
HN08-1区断面図



第2トレンチ

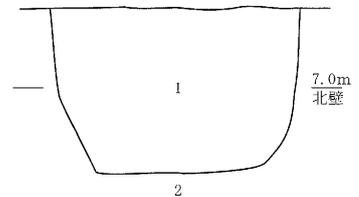
1. 灰黒色土 (耕作土)
2. 淡灰褐色混じり暗橙色砂質土 (床土)
3. 淡灰褐色砂質土 (床土下層)
4. 黄白色粘土 (Mg粒多含)
5. 淡黄白色粘土

OKDW07-1区断面図



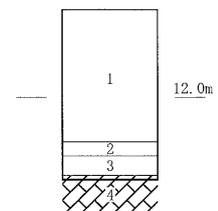
1. 盛土
2. 淡灰褐色砂質土 (床土)
3. 橙色混じり淡灰褐色砂質土
4. 暗灰褐色砂質土
5. 灰白色砂質シルト (地山ブロック含)
6. 黄白色粘土

NKW08-1区平面図および断面図



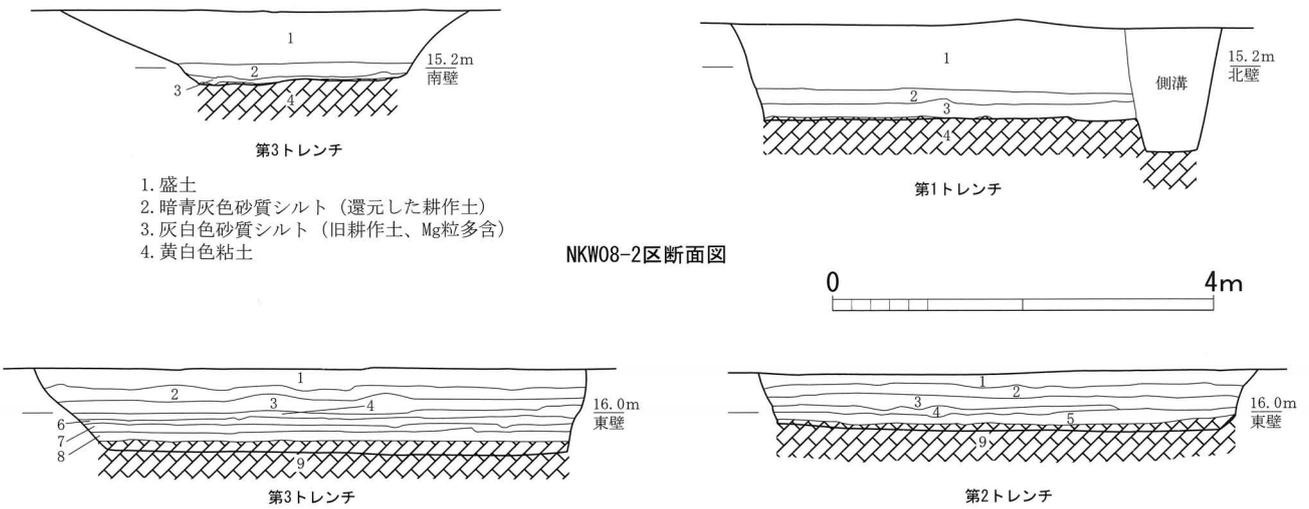
1. 盛土
2. 灰黒色シルト (耕作土)

ZT08-1区断面図



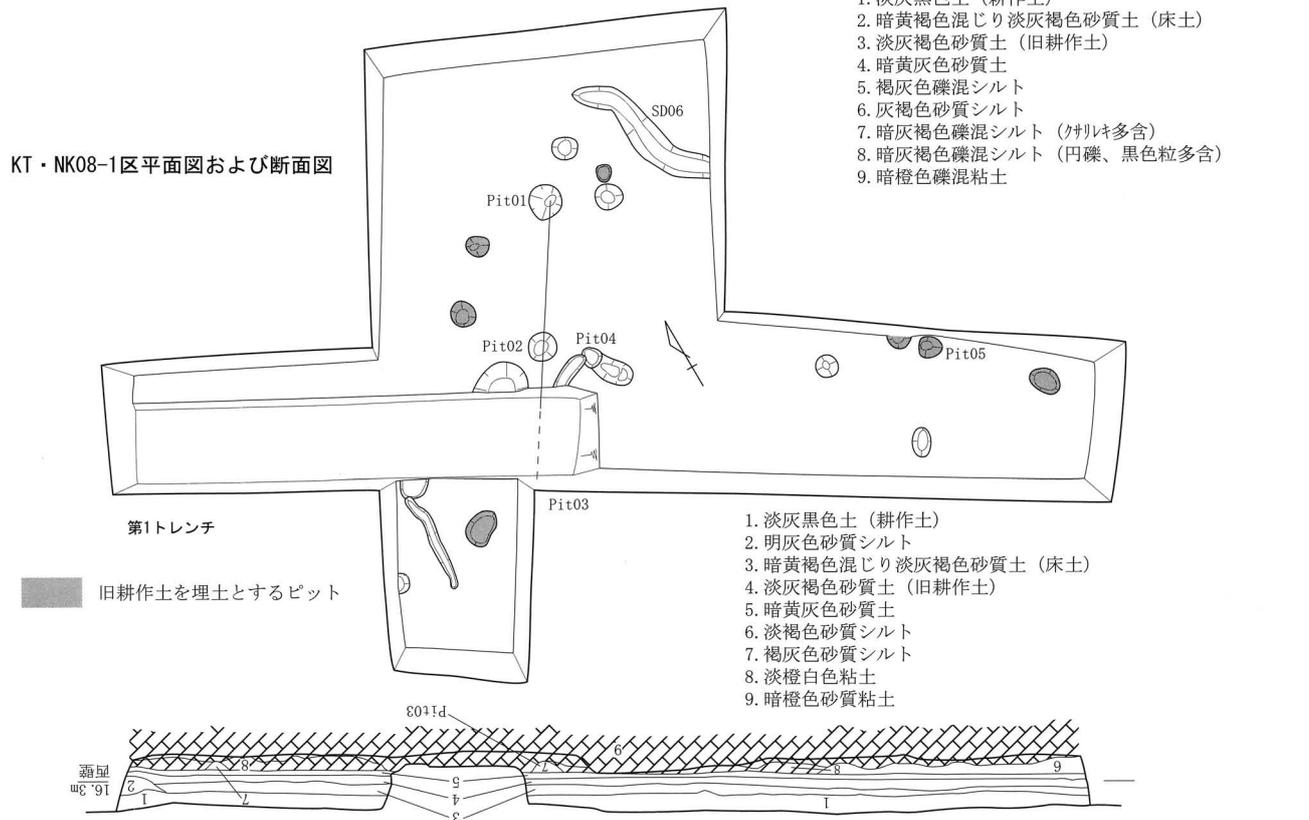
1. 盛土
2. 灰黒色シルト (耕作土)
3. 灰褐色混じり橙色砂質土 (床土)
4. 黄白色粘土

OKDW07-2区層序模式図



1. 盛土
2. 暗青灰色砂質シルト (還元した耕作土)
3. 灰白色砂質シルト (旧耕作土、Mg粒多含)
4. 黄白色粘土

NKW08-2区断面図

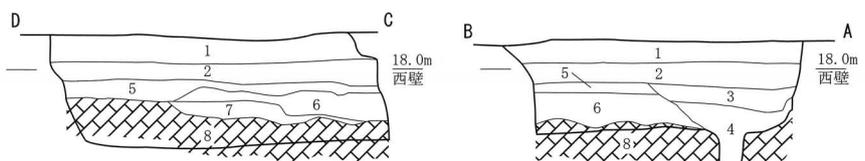


KT・NK08-1区平面図および断面図

1. 淡灰黒色土 (耕作土)
2. 暗黄褐色混じり淡灰褐色砂質土 (床土)
3. 淡灰褐色砂質土 (旧耕作土)
4. 暗黄灰色砂質土
5. 褐灰色礫混シルト
6. 灰褐色砂質シルト
7. 暗灰褐色礫混シルト (ケリキ多含)
8. 暗灰褐色礫混シルト (円礫、黒色粒多含)
9. 暗橙色礫混粘土

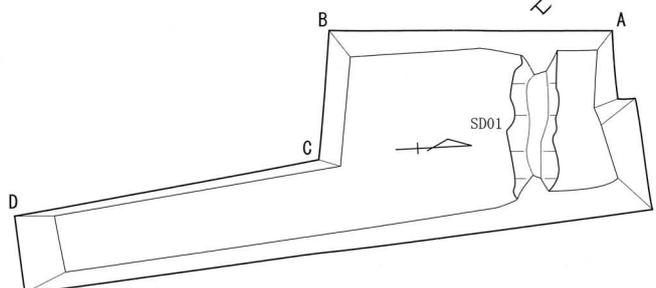
第1トレンチ

1. 淡灰黒色土 (耕作土)
2. 明灰色砂質シルト
3. 暗黄褐色混じり淡灰褐色砂質土 (床土)
4. 淡灰褐色砂質土 (旧耕作土)
5. 暗黄灰色砂質土
6. 淡褐色砂質シルト
7. 褐灰色砂質シルト
8. 淡橙白色粘土
9. 暗橙色砂質粘土



1. 灰黒色土 (耕作土)
2. 暗橙色砂質土 (床土)
3. 淡暗褐色粘土
4. 暗灰白色礫混粘土
5. 淡灰白色砂質シルト (旧耕作土、Mg粒多含)
6. 暗黄褐色混じり灰白色粘土
7. 黄灰白色粘土
8. 暗橙色礫混土

BS07-2区平面図および断面図





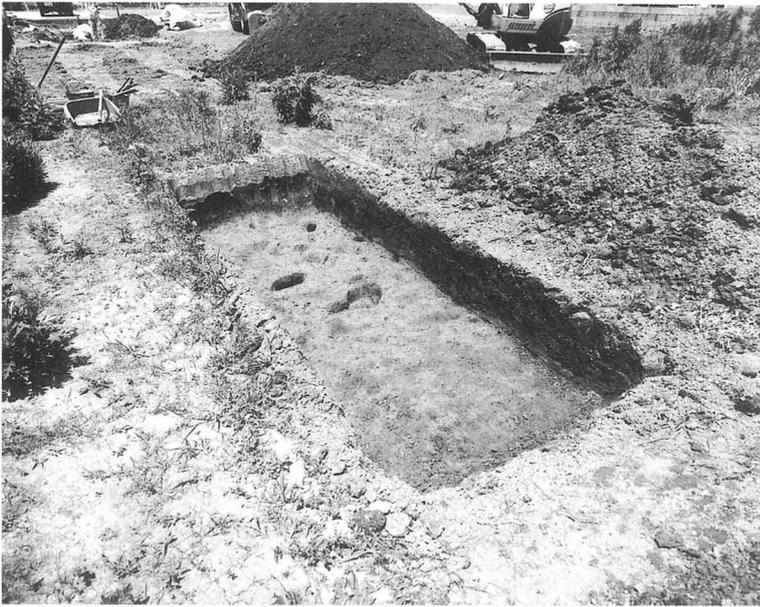
ON08-1区  
(南から)



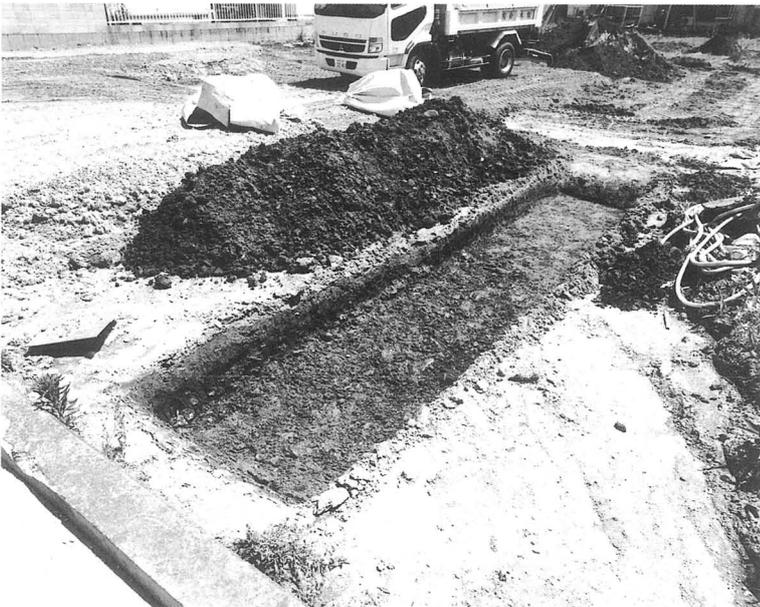
ON08-2区 第1トレンチ  
(南から)



ON08-3区 第2トレンチ  
(北西から)



ON08-4区 第1トレンチ  
(南東から)



同上 第2トレンチ  
(南西から)



ON08-5区 第1トレンチ  
(南西から)

ON08-5区 第2トレンチ  
(北西から)



ON08-6区  
(南東から)



ON08-7区  
(南西から)





0N08-7区  
(南東から)



0N07-8区  
(南東から)



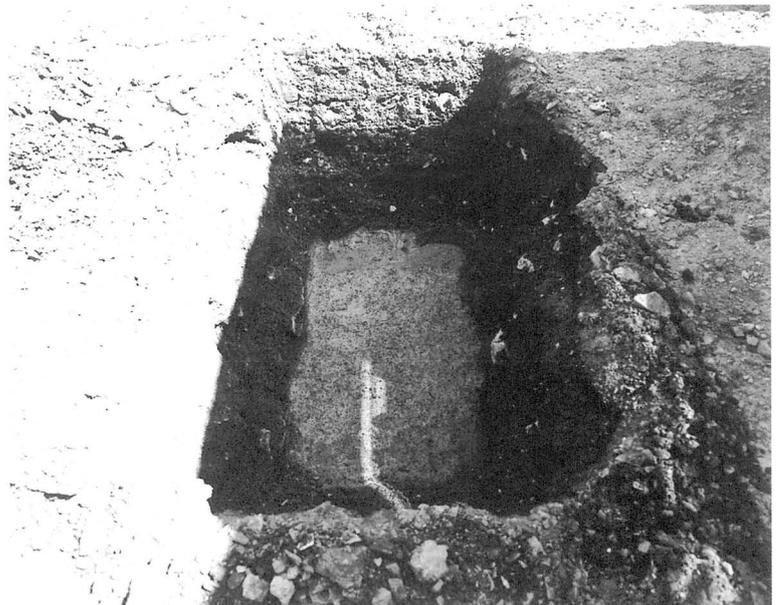
0N07-9区  
(北東から)



ON07-10区 第3トレンチ  
(南西から)



同上 第2トレンチ  
(北西から)



HN08-1区  
(南西から)



ZT08-1区  
(北東から)



OKDW07-1区 第1トレンチ  
(南西から)



同上 第2トレンチ  
(南東から)

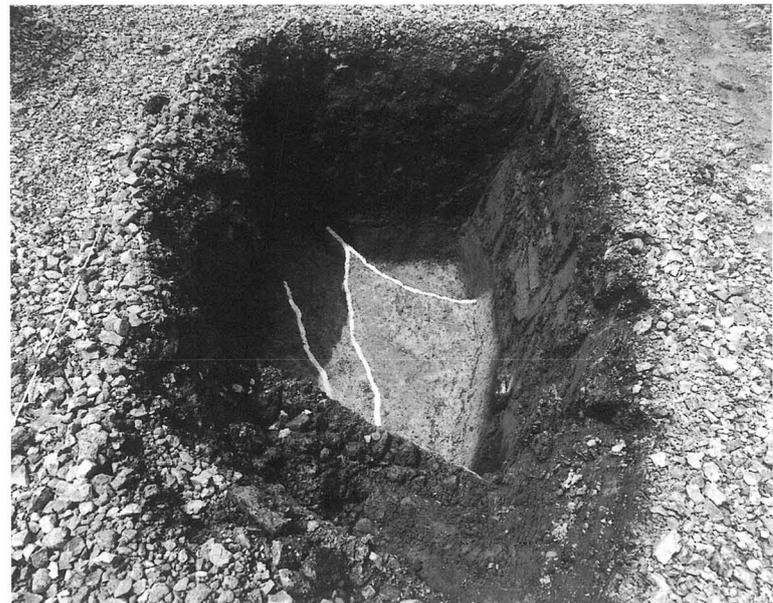
OKDW07-1区 第7トレンチ  
(南西から)

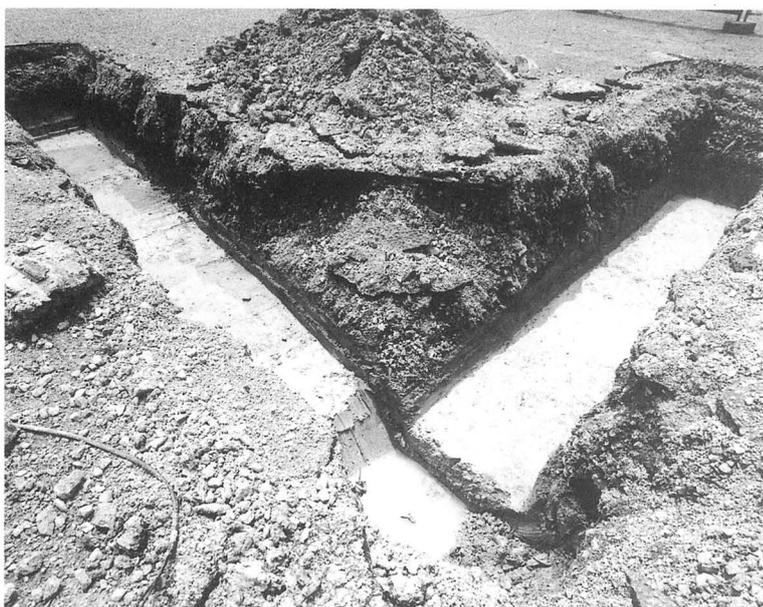


OKDW07-2区  
(東から)



NKW08-1区  
(北東から)





NKW08-2区 第1トレンチ  
(北東から)



KT・NK08-1区 第1トレンチ  
(北西から)



同上  
(北西から)

KT・NK08-1区 第2トレンチ  
(南西から)

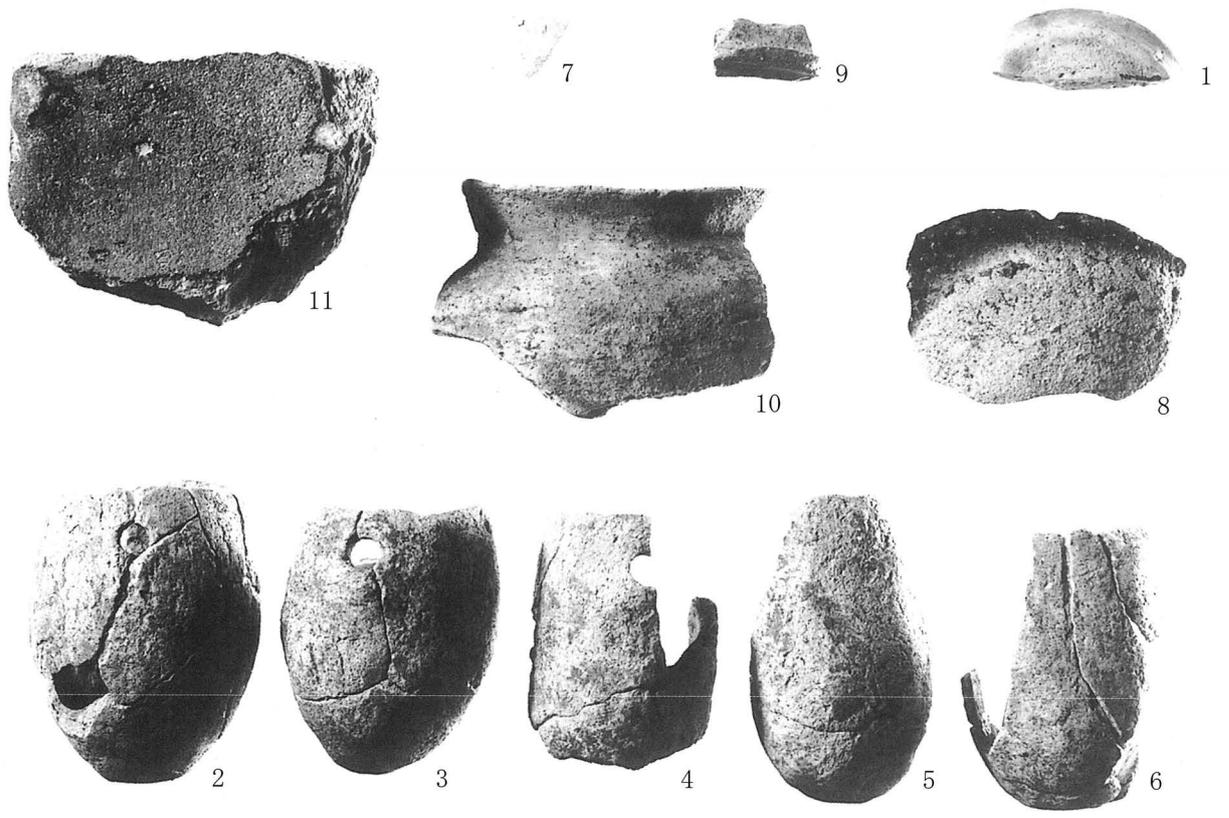


同上 第3トレンチ  
(南西から)

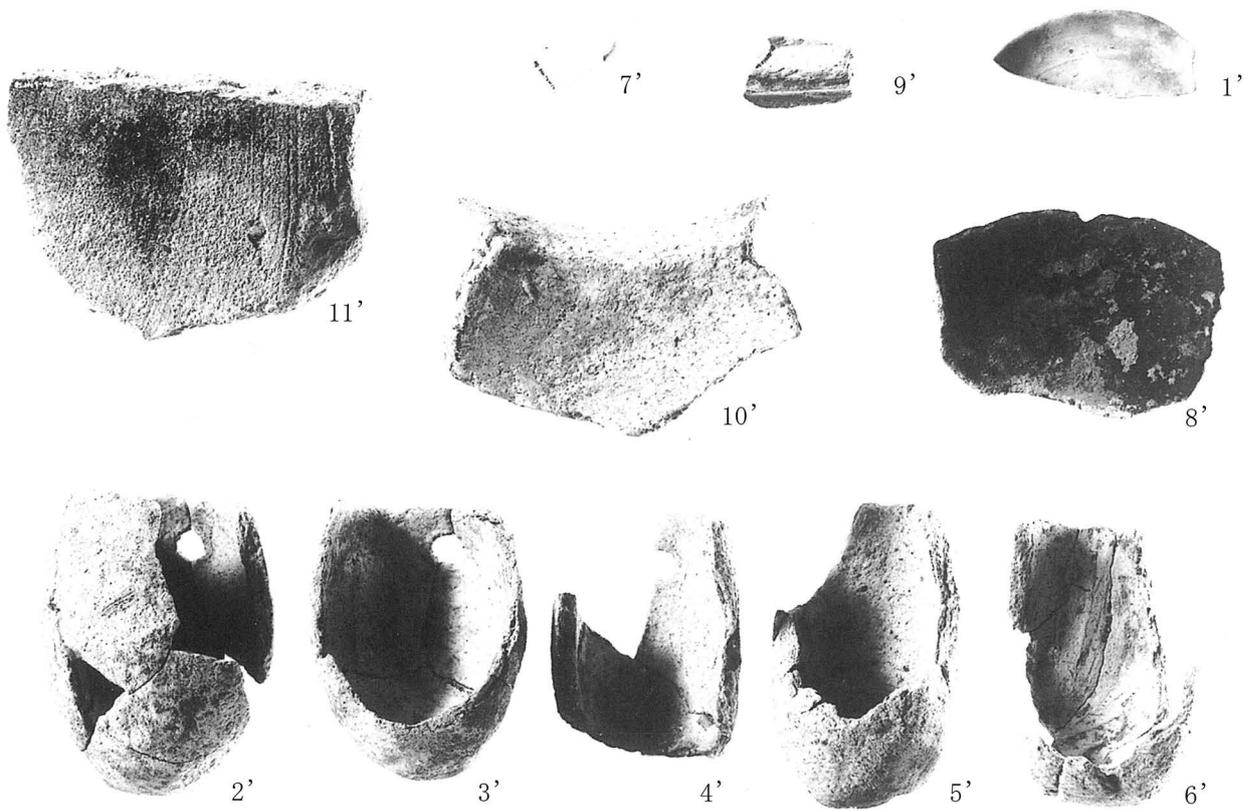


BS07-2区  
(北東から)





各調査区出土遺物



同上

# 報告書抄録

ふりがな	せんなんしいせきぐんはっくつちょうさほうこくしょ にじゅうろく							
書名	泉南市遺跡群発掘調査報告書 XXVI							
副書名	—							
巻次	26							
シリーズ名	泉南市文化財調査報告書							
シリーズ番号	49							
編著者名	石橋広和 / 城野博文							
編集機関	泉南市教育委員会							
所在地	〒 590-0592 大阪府泉南市樽井1丁目1番1号 Tel.072-483-2583							
発行年月日	2009年03月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡					
おのさと 男里遺跡	おおさかふせんなんしおのさと 大阪府泉南市男里	27228	ON	34度21分41秒	135度15分30秒	08-1 200810	3	個人住宅
						08-2 200807	10	店舗
						08-3 200812	90	倉庫
						08-4 200805	16	宅地造成
						08-5 200807	10	店舗
						08-6 200807	15	共同住宅
						08-7 200805	26	電話通信
						07-8 200801	5	電話通信
						07-9 200801	5	個人住宅
						07-10 200802	34	共同住宅
ほんだいけ 本田池遺跡	おおさかふせんなんしたるい 大阪府泉南市樽井	27228	HN	34度22分14秒	135度16分16秒	08-1 200809	5	個人住宅
ざとういけ 座頭池遺跡	おおさかふせんなんしおかだ 大阪府泉南市岡田	27228	ZT	34度22分38秒	135度16分12秒	08-1 200809	5	墓地、管理事務所、便所
おかだにし 岡田西遺跡	おおさかふせんなんしなこうじ 大阪府泉南市中小路	27228	OKDW	34度22分38秒	135度16分27秒	07-1 200801	100	給油所
						07-2 200802	10	電話通信
なこうじにし 中小路西遺跡	おおさかふせんなんしなこうじ 大阪府泉南市中小路	27228	NKW	34度22分30秒	135度16分41秒	08-1 200805	5	個人住宅
						08-2 200805	18	給油所
きたの 北野遺跡・中小路遺跡	おおさかふせんなんししんだちおのしろ 大阪府泉南市信達大苗代	27228	KT・NK	34度22分32秒	135度16分59秒	08-1 200811	50	宅地造成
ぶっしょうじ 仏性寺跡	おおさかふせんなんししんだちおのしろ 大阪府泉南市信達大苗代	27228	BS	34度22分18秒	135度16分56秒	07-2 200802	11	電話通信
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
男里遺跡 08-1		中世		土師器		飯蛸壺がまとまって出土		
08-2		弥生		弥生土器				
08-3								
08-4								
08-5								
08-6								
08-7								
07-8								
07-9								
07-10								
本田池遺跡 08-1								
座頭池遺跡 08-1								
岡田西遺跡 07-1								
07-2								
中小路西遺跡 08-1	生産	近世、近代	土坑、溝					
08-2								
北野遺跡・ 中小路遺跡 08-1	集落	平安	ピット、溝	黒色土器、土師器				
仏性寺跡 07-2	生産	近代	溝	瓦				

泉南市遺跡群発掘調査報告書XXVI  
泉南市文化財調査報告書 第49集

2009年3月31日

編集・発行 大阪府泉南市教育委員会  
泉南市樽井1丁目1番1号  
Tel. 072-483-2583

印刷 MK企画  
泉南市男里6丁目12番49号  
Tel. 072-485-4437

